

一家そろって

一九九〇年、夫の仁宝さんが息子のお嫁さんと一緒に来日した。離れていてお互いに心配していたが、これで心丈夫にもなり気持ちも落ちついた。続いて昨年の十月には、二番目の娘が夫と小学三年の息子と来日、息子夫婦と同じように近くに住むことができて、賑やかになった。

夫も娘夫婦も仕事が見つき、近所の人、職場のひとたちの親切な中で、すこしづつ日本の中に溶けこんだ生活が始まった。

七月 久しぶりに安達家を訪れた。桂子さんはふっくらとして、以前のような不安そうな面影はなくなり、子どもたちにかこまれて、とても嬉しそうだった。

二番目の娘さんは日本名を「中本」とつけた。中国と日本から一字ずつ、もらったといわれる。子供もすっかり学校になじんで、野球に明け暮れて、元気に背もどんどん伸びているという。仁宝

さん中本さんは「日本はいい、便利で清潔で空気もいい、ハルピンは工場の煙や土ぼこりでよれている日本にきてとても良かった」と言われる。

中本さんは未だ半年しかならないのに、日常の会話は不自由しない。桂子さんによりそい「お母さんは朝早くから、夜おそくまで働いて疲れているので、何とか手助けしたいと、おいしいお弁当を作ったり、給料もらったときお小遣いをあげる。」近い内に一番目と三番目の娘たちの、家族六人がくる予定で、全員がこの静岡の地で生きていく。

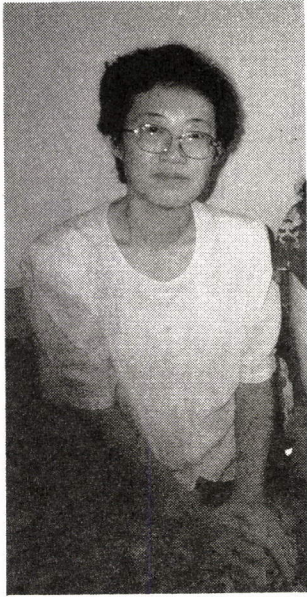
日曜日は、家族全員でキリスト教会にいったり、毎日の無事を神のお蔭と感謝している。未知の国へ知るひともいない所で、数々の苦労を重ねているだろうが、家族みんなが助け合い支えあいながら一生懸命、根を下ろそうとしている。

戦争の犠牲者でありながら、長い年月うちずてられ顧みられることもなく、また帰国しても何の援助も支援もない。ボランティアや周囲の好意、当事者の努力にのみ任せられている。戦争が終わって五十年近い歳月をへて、やっと桂子さ

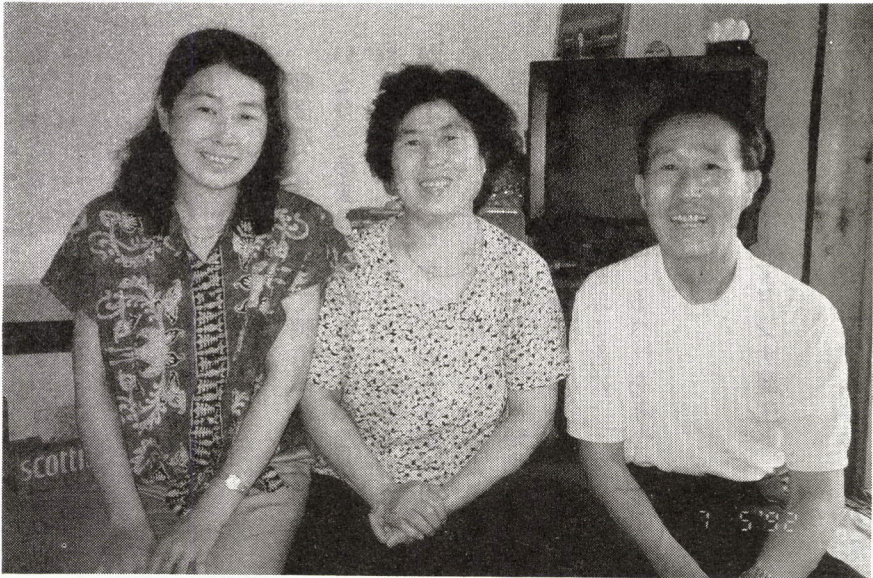
んにあるべき生活が生まれつつあることを感じて良かったと。そして心からこれからの皆さんの幸せを願っておいとました。

おわり

「安達 桂子さんのお話を伺うについて、その都度 通訳を「襲雨華」日本名「原野雨華」先生にお願いしました。先生は残留孤児だった日本人の夫と、子供三人と来日、努力して日本語を覚え中国語の先生をしていらっしやいます。お忙しいなか、色々な助言もたまわり、本当に有り難うございました。先生は帰国した孤児の方たちや、中国人の手助けもされ、頼りにされています。」



襲雨華先生



中本さん

桂子さん

仁宝さん

—パラオから戦火をのがれて—

元県議会議員 水野 シツさん

西澤 功子

はじめに

一九八七（昭和六二）年四月、婦人参政権
を行使して四〇年目のこの日、私は七十四才
で県議選をたたかっていた。

「三〇年間の教職経験と五期二十年の清水
市議會議員経験、それに加えてあなたは戦前、
戦中、戦後を激動する中を生きてきた体験を
県政に生かして欲しい。」

尊敬する恩師から訓されて、私は県議会へ
立候補することを決意した。

この書き出しで始まる大切な原稿と、水野さん
が静岡県議會議員として当選された当時の貴重な
資料をお借りすることができ、それを大事に持ち

帰ったのである。

戦後四〇数年たつて戦争体験の風化が叫ばれて
いる今、あまり語られることのなかった個人の体
験を書かれ、熱く語ってくださいるのは、水野さん
が誰よりも強く、すべての人々が平和で人間らし
く生きられる社会を、願っているからである。

私たちはその苦悩を知り、当時の女性たちのお
かれていた立場や状況をしっかりと見すえる目を
養い、女の歴史を学ぶことにより自分自身の今
後の生き方の『道しるべ』をみつけることが出来
れば幸いである。

一 七十四才のマドンナ誕生

私たち女性を代表して、「いつも自分のことは

省りみず人の為に働く」という強い信念を持って、静岡県史上三番目の「女性議員」が誕生した。

運命のその日、一九八七（昭和六二）年四月三日のマスコミ関係者はこぞつて水野さんの県議選初当選を記事にした。

「七十四才のマドンナ笑う」

——水野さん社会の議席を奪回——朝日新聞

また、四月十五日発売の朝日ジャーナルでは

「統一地方選で目立ったのは、社会党マドンナに無党派主婦の女性パワー」。

政治なんて遠いもの、とのためらいが政治の舞台に上り始めた。選挙のやり方も政策も男たちとは一味違います。男の論理で固められた政治の世界が、少し揺らぎそうな気配もして——と編集者は書いている。

水野さんは、初めての女性清水市議会議員として五期、何と三〇年の長きにわたって議員活動を経験し、そのきたえぬかれた政策と行動力は今でも、高く評価されている。

清水市議選への出馬準備中に、「平等なくしては平和なし、平和なくしては平等なし」とスウェーデンの女性軍縮大臣が云ったこの真理は、そのまま日本国憲法の理念であると語った土井たか子元委員長からも、直接お声がかかっていたの転進であった。

立候補宣言後、後援会活動はわずか一カ月間しかなく、苦しく不安な闘いであった。

高齢と立ちおくれ、このむずかしい条件のたたかいを支え、激励し運動してくれた中心は、敗戦直後から生活とたたかいたかいたか、教育問題を中心に母親運動を続けてきた友人たちだった。

五党七人の候補者が、五議席を争うのである。けれどいつもそうであったように、「お金は使わない清潔な選挙で教え子に恥じないように」と、後援会と相談して清潔な選挙を実践した。

投票日当日、午後九時十五分、当選確実の知らせを受けて事務所に姿を見せた水野さんは、選挙後の疲れも見せず、いつものスマイルをたたえて、今は亡き松前重義東海大学総長や、後援会長の加

藤とよさんたちと熱いあつい握手を交わした。思えば各党一人づつ当選するという、非常に苦しい闘いであった。

何回も万歳をくりかえし、酒だるを割って後援者たちと初当選を祝ったことはいうまでもない。後日水野さんはこの日のことを、

「思わず感激の涙が流れました。結果が出るまでは心臓が躍りそうでした。私の長い人生で皆さんの支援にこれほど感謝したのは初めてです。」と喜びを語った。



こうして八年間も女性議員のいなかった県議会に熱海市出身の竹内静香さん（自民）と二人の女性議員が誕生したのである。

ともに市議会議員としての経験もあり、「党派を越えて女性の地位向上のために、今後ともライバルというより、力を合わせていきましよう。」と握手した。

また水野さんは語った。

「女性の力で地方政治を変えることは、ある日突然できることではない。地域に根ざした婦人運動の積み重ねで少しずつ女性が問題意識を高め、議会へ代表を送る意義を認識し、力を合わせることによって、女性議員が誕生する。」

女性議員が地方政治を変えるのではなく、女性たちが変えていくのです。」

二 県議会議員として

四月に当選した約半年後の一九八七（昭和六二）年一〇月八日、県議会定例会で女性議員による九

年ぶりの一般質問が行われた。

県議会史上初めて水野、竹内両女性議員が登壇するとあって、男性議員からひとときわ高い拍手が送られ、答弁に立った斉藤知事も、これまでにない気の使いようだった。

「婦人の社会参加の場は増大しつつあるが、最も遅れているのは政策決定の場。県の審査会には女性性が八%しかない。」

と県の現状を総論で指摘したのが竹内県議。これを受けて水野県議が

「県の教育委員に女性が一人もいない。家庭では教育問題で女性の役割が大きく関心も高い。」と各論に切りこんで質問した。また竹内県議が女性の就業と身障児の就学問題を中心に、水野県議は県職員と教員の女性採用や、昇任状況についてであった。

教育長 「管理職への昇任は人格、識見を考慮し、男女の区別なくやっている。」

水野県議 「女性校長は小学校に四人しかいません。女性は人格、識見が劣るのですか。」

乗 往 相 世

1987.10.9



県政史上初の女性

県議2人同時質問

八日の県議会一般質問、県政史上初めてという女性県議入と身障児の就学問題を中心に質問した。議長に名前を呼ばれて登壇する、自民党席から「例会の大村越子さん（共産）

当時以来とあって、百十の傍聴席は、大半が女性で埋ま

まず、竹内静香さん（自民）

「写真（左）は、女性の就業と身障児の就学問題を中心に質問した。議長に名前を呼ばれて登壇する、自民党席から「例会の大村越子さん（共産）

じが飛んだ。初めはちやちや緊張気味だったが、最後までよこみな

いし、しっかりした質問で、「イヤ、立派だ」と感嘆の声も上がった。二番手の水野シヅ子さん（社

会）は、県職員と教員の女性採用や昇任状況について、志健・県教育長が「管理職へ昇任は人格、識見を考慮し、男女の区別なくやっている」と答える、「女性校長は小学校に四人しかいません。女性

性は人格、識見が劣るのですか」。県教育委員への女性登用も要求、「前向き検討などという答えては困ります」と追っ

た。竹内さんは「わじは市議時代から慣れていますので、それより、みんなが目をつけているところで肩力が入ったつもりません」と自己分析、七十五歳と県議中最高齢の水野さんも、「高いは答えになっていませんね。委員会でもた追及します」。

朝日新聞朝刊

また、神奈川県で女性教職員が多く管理職に登用されている例をあげ、教育長にその登用の意志の有無を問いただし「現在学校長五人、教頭二十五人が登用されているが、今後女性の教職者の登用をはかっていきたい」と答弁している。

斉藤知事は、女性教育委員の起用に「イエス」とのべ、「次期人事交代までに適任者を選ぶ。」と約束し、婦人会館の建設にも積極的に検討を進めている、と押されっぱなし。

翌一九八八（昭和六三）年七月の第二回目の、一般質問では学校給食の充実とそのあり方、学校図書室の活用、読書指導の必要性、働く人の為の条件整備など、再々質問もふくめて知事、教育長を鋭く追求した。

知事は「ちよつと緊張しましたよ。母性愛に包まれた温かみのある質問だったし、ああいう質問は女性でなければできないね。」と感想を語った。

本会議場の傍聴席は、地元清水市の女性、退職婦人教師の友人をはじめ、大勢の支援者でいっぱいであった。

三 女教師をめざして

「水野さんのお母さんはどんな方でしたか。」
「とてもやさしい人で、お人好しでしたねエ。」

子供の頃から本が好き、スポーツが好き、という成績の良い活発な女の子であった。

母校の校長先生に「学校の先生に向いているから師範学校へ進むように。」とすすめられた。

父親は「学校の先生にするとお嫁に行くのが遅くなる。もらい手がなくなる。」と云った。

大正初期当時は「女らしくしなさい。女に学問はいらぬ」というのがあたりまえの考え方だったから、心配だった父親の気持がよくわかる。

しかし両親そろって子供たちに深い愛情をかけてくれ、共によく働き、経済的にも精神的にも余裕があり、進学することを許してくれた。

生家はお茶とみかんと、自家用の米を作る生産農家、中農と謙虚に云われたが庵原郡袖師町の旧家である。

一九二二（大正元）年一〇月五日、父武田丈作母てる、の二女として生を受ける。

五人きょうだいのまん中、兄弟姉妹に囲まれて、このうえなく理想的な恵まれた環境のもとで、のびやかに明るく、やさしさと強さを天性のものとして、自由にそして大切に育てられた。両親の理解も得られたが、最終的には今も健在の姉上のすすめで進学を決意した。

こうして一九二七（昭和二）年の春四月、一九〇六（明治三九）年開校の、静岡女子師範学校へ晴れて入学した。一九二五（大正一四）年西草深（浅間神社前）から杓谷（市立東中学所在地）に移転。一九二三（大正一二）年までは全寮制であったが、以後は二年以上の生徒には自宅からの通学が認められた。一九四九（昭和二四）年に発足した静岡大学教育学部の母体の一つである。

（静岡大百科辞典）

二年生になると自宅から静岡まで電車通学が許

可された。定期券は一年分で二〇円、それに教科書代を学年始めに家から二〇円いただけば、あとは国から支給される一〇円で学費は足りた。

学校で決められた制服と靴、おさげ髪的女子学生姿はどんなに知的で素晴らしかっただろう。またテニスが大好きで選手として活躍し、五年間は勉学とスポーツに明けくれたそうだ。

女子師範にはもう一年勉強できる専攻科があったので、父をくどいて専攻科へ進み、さらに一年間専門的な勉強をした。

専攻科目として先ず体育と歴史を選び源氏物語にも興味を持った。あと一つ家庭科では、食品化学的な栄養学やカロリーの学習もあり、戦後学校給食が始まった時には、カロリー計算など直ちに出て役立った。

和裁と共に洋裁にも興味をもち、自分の洋服は時間を作って自分の手で作ることを覚えた。

一九三三（昭和八）年、二〇才で専攻科を卒業して、庵原尋常高等小学校に勤務する。師範学校

卒業者はみんな国費を頂いたので、三年間は

公立学校に勤務することが義務づけられていた。

初めての給料日、いっしょに勤め始めた男の先生がとなりの席にいて、何気なく俸給の明細書が目に入る。男の先生は五二円、私は四六円。これはおかしいと思つて上席の女の先生に尋ねると、

「教師はお金のことを口に出して云つてはいけません。」とたしなめられる。

女子師範と男子師範のちがいはあつても、学歴は同じ専攻科卒業。同じように高等科一年の男子と女子を受持ち、一生懸命教えているのに、と不思議に思つた。

「これが社会に出て初めて受けた男女差別でした。」と云われる目がやさしく光つていた。

四 結婚、そしてバラオへ

一九三六（昭和一一）年一月一日、仲良しだった友人の兄上で、同じ教職の道を歩む水野隆一氏（当時行田姓）と結婚その年末に長女明世さん

を出産。

一九四〇（昭和一五）年、かねてから夫の隆一氏の憧れていた、南洋統治下のバラオ島コロール町のバラオ第一小学校に教師として赴任する。

第一次大戦後、旧ドイツ領から日本の委任統治となり、トラック島、ポナペ島、サイパン島、そしてバラオ諸島など、散在する南洋諸島を統治する南洋庁がコロール町におかれてあつた。

横浜から南へ三千キロの島であるが日本人約一万五千人と島の人が五千人位住むにぎやかな町となつていた。

これより水野さんのご好意により、

著書「仏桑華は碧空に映えて」―バラオより生還の記―より抜粋させていただきます。

バラオの生活は暑いが住み心地よかつた。

果物は豊富にあり、街の中央部はすべて日本人の家で、学童はその子弟である。経済的にもゆとりがあり、物価は内地より高いが月給は内地の二倍

である。

南洋へ赴任して翌年、一九四一（昭和一六）年二月八日、太平洋戦争が始まった。

この頃、内地は戦時色が濃くなりつつあると便り得知る。秋ごろから日用品や食糧品も目に見えて不足気味となり、主食の米や野菜など内地に頼りきっていたパラオ島の日本人にとっては、重大なことである。

正しい戦況は、ほとんど知らされていない。

翌、一九四二（昭和一九）年三月三〇日未明、突然の大空襲。二兎をかかえて防空壕にとびこむ。

港と街中は爆撃で建物は全壊しすべての機能を失い、二日間の空襲が終るとコロール町の北端にある岩山へ待避命令が出た。

四月半ばになってパラオ本島で農場を営む村へ臨時の分校が開設し、夫と共に赴任する。

六月末になるとサイパン島の様子が風の便りに伝わってくる。それは悲しい戦況であった。

サイパン島の次はパラオへ、と思うと戦争が再び身近になったことを覚え、やがて私たちもサイパ

ンで玉碎した人々と同じ運命をたどるであろう、と覚悟しなければならなかった。

「君たちを、ここまで連れて来るべきではなかった。三月の大空襲のあとで、すぐ内地へ帰る手続きをすればよかった。許してくれ、こんな戦況になることはあの時わかったはずであるものを。」

夫の初めての弱音に私の心はいっそう動揺する。「教師といえど、召集されるのは時間の問題だ。

お前のそのからだで、子どもたちをどうして守っていかれるだろう。教師の義務、そんなヒューマニズムが生かされる時勢ではないのだ。」

あなたにも、召集令状がくる。

教職一筋に生きてきた者にとって、それは考えられないことであった。

それに八月初旬に第三子の誕生を予定しているやがて夫は出征、私は出産の迫り来るのが恐ろしかった

赤い一枚のハガキが来たのは七月三日である。

「十日にパラオ本隊へ入隊が決った。コロール

本部へ十時までに入隊せよ。」

「からだに氣をつけてくれ。」

これだけ云うのが精いっぱいなのであろう。青ざめた顔に、こわばった口元がゆがむ。

内地で幾度も見たのぼりも、出征兵士を送る歌もなく、静かな出征であった。私はふたりの子どもを手をしっかりと握り、これが永遠の別れとなるであろう、とじつとその後ろ姿を見つめた。

夫は、いちどもふり返らなかつた。

五 別 離

それから十日後の七月二十日、予定日より二週間も早く、望んだ通り女の子が産声をあげ『晴世』と名前をつけた。しかしわずか三日後、産後の身をいたわりながら、家の中を整理する。

万一の時に備えて食糧を袋につめ、子どもたちにはリユックサックへ着替えをつめて持たせる。

何とか内地へ帰る方法を考へての配慮であった。

早産のため軽く小さな晴世。病院船に乗るため

生れて五日目に早くも旅に出る。山道をトラックにゆられ、意識が薄れる中で、「しっかりとなくしては」とかけつけたマラカル波止場には、船も人影もなく、なんとすでに船は出航したあとであった。

かけつけて来た夫と再会し、荒れ果てた官舎で疲れたからだを横たえる。夫の肩にかけたカバンの中からカンバン・缶詰・粉みそなどとわずかな米と練乳が二缶、これで当分飢えることはない。

しかし夫は、間もなく隊に帰らなければならなかつた。

「すべてを天命にまかせよう」

遠ざかつてゆく夫の靴音を聞きながら目を閉じた。

南洋の暁は早い。しかもここは安住の地ではない。耳馴れた爆音に驚き、防空壕へとびこむ。

ぐったりしている晴世に出ない乳でも、と乳房を与えろが反応はない。小さな胸に手を当てると、心音がかすかに指につたわってくる。

「生きている」、と抱きしめる。

「伍長殿から頼まれて来ました。」兵士から手

渡された手紙によると、アイミリーキの奥地、朝日村に国際無線の社宅があり、まだ安全のようだから、と二人の兵士に送られて波止場とは名ばかりの簡単な舟着場へ着いた。

六 朝日村にたどり着いて

道端に腰をおろして夜明けを待った。カンパンをかじりながら地図を頼りに歩き始めた。一条のせまい乾いた道が続き、赤道直下の太陽は容赦なく照りつける。のどはからからに干上がって声も出ない。下腹部がきりきりと痛み、ぐらぐらと目まいがする。

「おかあさん、早くお家のあるところへつれてって。」淋しさと空腹と疲れに、か細く絶え入るような貞男（長男）の声に、全身の痛みは倍加する。

夕方になってやっと熱帯産業研究所の社宅へたどりつく。社宅の奥さんが出産後間もない私の身を案じて、晴世の世話までして下さる。

「いつも肌身を離さないで、いざという時の用意をしていますの。」
淡々と話ながら白い紙の包みをふところから取り出した。青酸カリである。

これさえあれば敵に辱めを受ける前に命を絶つことができるという。

無理に頼んで三包いただし、僅かに残っていたドロップといっしょに、ポストンバックの奥へしっかりしまった。

熱帯産業研究所を後に、国際無線所のある朝日村へ重い足をひきづりながら歩く。

ようやく社宅へたどりついて三日目 南洋庁からジャングルへ避難するため、再び道なき山路を歩くよう指示される。

幼い子ども三人と産後の疲れ果てたからだで、山中のジャングル生活に幾日耐えることができるだろう。

「どんな時でも、生きる希望を持つのだ。君にはがんばれる力がある。子どもたちを頼む」

夫からの手紙を思い出す。

七 生と死

一九四二（昭和一九）年八月十二日

「婦女子を疎開する船の準備ができた。早く波止場へおりてくるように。」

「ありがとう。内地へ帰られるのですね。」

元氣な青年に助けられ、大勢の引き揚げ者といっしょにジャングルから遠い出して港にたどり着く。

引き揚げ船は五派な巡洋艦「鬼怒」という。死闘の島パラオをのがれて、艦船は珊瑚礁を越えて大海原へ出た。制空権も制海権も完全に米軍に占領されていたパラオを脱出できたのは、奇跡としか思えない。

九月一日、商船三隻に分乗してセブ港に着き、マニラ港に着く。トラックで街の郊外らしい所へ運ばれここでも軍隊に守られて二十日間を過ごす。「鬼怒」で十日もすれば日本へ帰れると思っていたので不安はつるばかりである。

三週間たってようやく台湾行きの船に乗ること

が知らされる。

七隻の船団が組まれ船はルソン島の沿岸伝いに北上を続けるが、出港して二日目、爆音と共に船が大きく揺れた。

前甲板が魚雷ではねとげされ二分ほど前までいっしょに前甲板にいた三十人位の母と子が犠牲になる。

戦時下の人の命は一瞬にして生と死に分かれ、どこで、どうして生命を失ってしまったのか記録も残さず消え去っていく。

八 カミギン島につり残されて

リエガン港で魚雷を受けてから、母乳は一滴も出なくなってしまった。夜になって暗世が泣き始めると、出ない乳房を与えて夜泣きを压える。

暗世は、この小さな体でどこから力が出るのかと思うほどぐいぐいと、出ない乳首を吸い続ける。やがて疲れて乳房を離す乳児を力いっぱい抱きしめる。

戦争とは、いたいけない子どもの命も母親の嘆きも受け容れることの出来ない、非情な世界であることを痛いほど感じた。

こんな所で子どもを死なせてはならない。どうしても守り通すのが母親の任務である。

空襲をさせて、フィリピン島と台湾の間、バシー海峡にあるカミギン島に上陸し、野宿をしてから幾日すぎたことであろう。

月明かりの美しい夜であった。元気な人声に意識を取りもどす。

「さあ、勇気を出して歩きなさい。お迎えに来ましたよ、みんな生きてるね」

辛うじて生命を保ち続けていた。

四人とも、生きて船に乗せていただいている。

駆逐艦は、バシー海峡を矢のように走り、翌日の昼頃台湾の高雄港へ入港した。

一九四四（昭和十九）年十月三十一日、生還のこの日は今も鮮やかに覚えていてる。

暗世が生まれて百十三日目、貞男四才、明世七才、私は三十一才になっていた。

九 台湾日記

一九四五（昭和二〇）年 八月十五日

台湾の夏は内地より一段と暑い。

「今日はとても大切なお話があるそうですから、組長さんの家へ集まってください。」と連絡があり、広い部屋に扇風機がまわり、組長さんは直立不動の姿勢で、十二時近くになると、

「今日はかしこくも天皇陛下の玉音放がありますから、皆さん慎んで聞いてください。」とラジオのスイッチを入れる。ザアザアと雑音のみで玉音らしい音声は聞こえない。

「お母さん、日本は戦争に負けてしまったと、きょう先生がおっしゃいました。」

「明ちゃん、負けたなんて言うのと兵隊さんに叱られます。」とたしなめる。

僅かにはいる情報でうすうす感じてはいたが、今日敗戦の日になろうとは、予想外である。

思えば長いながい戦争であった。

日本歴史上かつてない敗戦国となった。

何のために日本は世界中を相手に闘ったのだらうか。どれほどの人々がこの戦争で亡くなったことであらう。

日本人だけではない。バラオやサイパン島の人々、フィリピンの住民もこの戦争に巻き込まれてしまった。

戦争の終結は死からの解放である。

私たちは生きています。

一九四〇（昭和十五年）年、中国大陸の戦いで終結するものと思つて、私たちはバラオ島へ赴任した。しかし戦線は拡張し太平洋沿岸の国々はもとより、東南アジア全域が戦場の巷と化した。

バラオ島を脱出して一年が過ぎた。

飢餓の島となったバラオで生きることとはむずかしい。夫は生存しているだろうか。

夕方、三児を連れて台中神社へ参拝に行く。

長い間カバンの底へしまつておいた青酸カリの白い包みを持ち出した。本殿の左側の大きな神木の根元を掘って、三つの包みを埋める。

「おとうさん、私たちはこの包みを開くことなく

生きることができました。今日こそ、この包みとお別れするのにふさわしい日だと思えます。」
拝殿の鈴が鳴り響く。万感胸に迫つて思わず涙が流れる。

生きていてよかつた、幾度か生と死のぎりぎりの限界で救われ、やつとの思いで台湾の地を踏むことができた。台湾は内地へ引き揚げる途中の寄港地である。

誰一人知る人のいない台湾ですごした、一年五ヵ月に及ぶ生活が記録された黒い表紙の日記帳を、水野さんは宝ものとして今も大事に保管しておられる。

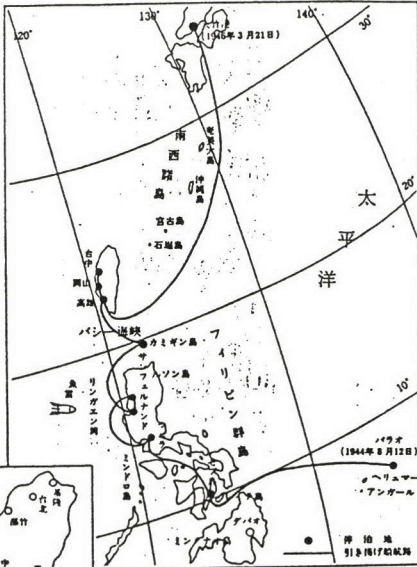
私はおそろおそろ直接手にとつて見せて頂きながら、その文字を読むことが出来なかつた。

インクのアともうすくなり、綴じ糸は変色して乱れて四〇余年たつてかなり傷んでいる。

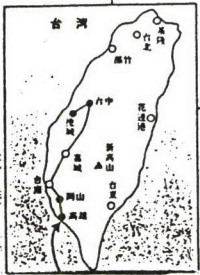
それは文字が読めないのではなく、『どんな想いで書かれたのだらう』とこみあげてくるものがあつて私の目で文字を追うことを許さなかつたの

である。

実にその内容はわかり易く正確で、買物の細かな植動さなど、日々の生活が少しづつ活気を取り戻し、落着いていく様子 三人のお子さんがたくましく成長される様子など貴重な事ばかりである。またある時は人と人との心の交流を大事にしながら、マラリヤの高熱で倒れた明世さん（長女）の看病に明け暮れる母親の心情が鮮やかに記されている。



引き揚げ航路
仏桑華は碧空に映えてより



一〇 ふるさとへ

一九四六（昭和二一）年、三月九日、夢にまでみつづけていた待望の日、台湾の岡山駅で知人たちに見送られてから高雄駅までは三〇分位、そこから港まで延々と並んで歩く。が待ちに待った船が来たのは三月十七日の夕方であった。古い商船だが足を伸ばして休むスペースはある。

空襲も魚雷も死の恐怖もない。さまざまな想いを抱く人たちの乗った船が広島の大竹港へ着いたのは三月二一日の午後であった。

港の倉庫が宿舎に当てられ、荷物を置いて三児と共に岸壁に立った。

「この広い海のあちこちで何人の母と子が、また軍人さんが戦死されたことか。」

戦争とはいったい何のためにあるのだろうか。こんな苦しみは、再びあつてはならない。

生きて帰った私たちは、この体験を通して戦争のない世の中にする努力をしよう。

これが大切な命を失った方々を弔う唯一の道では

ないか。」と記してある。

一九四六（昭和二一）年三月二三日の昼頃、やつと汽車に乗り、二四日の夕方清水駅におり立つことができた。知らせることができないので誰も迎える人はいない。

駅前で暖かなうどんを食べてやつと元気になる。神明神社近くの実家まで約三キロ、一步一步ゆっくり歩く。

東海道から上嶺へ向う道へ入ると、父母の住む二階から灯が見える。

目頭がうるみ、目がかすむ、

「さあもうすぐよ。」

三児を連れて、生家へたどりついたのである。

この日の父母や家族の驚きと喜びを、水野さんは終生忘れられないことだろう。

「苦勞したろうがよくがんばってくれたね。」

一言の勞りで涙が溢れる。

一年八カ月ぶりに、先に復員していた夫の隆一氏と、劇的な再会をする。

隆一氏は、ペリリュー島の航空基地から連日の激しい爆撃と食糧難の中を生きぬいて、パラオ本島の山中で敗戦を知った。

一九四六（昭和二一）年一月末、送還船で帰国
一九六五（昭和四〇）年二月三日、清水市立高部小学校長現職のまま、五才才で他界された。

一 ほかの道 知らずこの道 花茨

終戦を海外で迎えた日本人は、およそ六四〇万人。軍人と一般人がほぼ同数といわれるが、組織を持たない一般邦人にとつての引揚げは、戦争のもたらした『もう一つの悲劇』でもあった。

東南アジア、大洋州、台湾など南方からの引揚者は大半が昭和二二年頃には帰国したが、その数は一八〇万人を越え、全体の二二%にもあたる。このような歴史的にも例をみない人間の悲劇的な大移動の際におけるさまざま苦勞は、体験した人にしかわからない苦難の連続であった。

（一億人の昭和史）

いつも水野さんはおつしやる。

「あの時死んだと思つて、また引き揚げる途中で何の手当ても受けられずに亡くなつていった人たちの代弁者になりたい」。

また、「皆さんの善意に支えられて今まで仕事が出来て来ました。私を必要として下さるかぎり、何でもお手伝いしましょう。」とも。

「ほかの道、知らずこの道 花茨」

初めて市議選に当選された時、お姉さんが「今後のけわしい道を進む時、茨をかきわけながらしっかりと歩みなさい」と送つて下さつた俳句で以後長い議員生活の『道しるべ』であつた。

「政治は、どこか遠くの偉い人たちがするもの女の議員に何が出来る、」こんな声にまどわされることなく、私たち女性が地方政治の中に代表を送ることによって、今まで見えていなかった所へ光をいつぱい当てる事が出来る、と信じた。

また身近な問題を、女性ならではの、の視点でしっかりと見つめ、本音で語り合うことが出来たらどんなに政治が身近かなものと思えてくることか。

いま、七八議席ある県会議員の中に女性議員は藤枝市の松岡紋子さん（社会）ただ一人だけである。厚生委員として福祉、厚生、保健、医療等、民生部と保健衛生部の所管する事柄を、現状に照らして、また関係する人たちの生の声に耳をかたむけて活躍中である。

去る平成四年三月六日付、静岡新聞夕刊の政経人往来で水野シヅ、社会党本部女性対策局長（前県議）とお名前を見つけた。

清水市の石炭火力発電所の問題で、斉藤知事が反対表明したのを受けて、直接知事と意見交換された とある。また清水市の活性化についても話され、六三年に三保地区でスタートしたCCZ（海辺のふれあいゾーンの整備計画）についても、話し合われた。

かつて清水市袖師の横砂海岸は、多くの市民にとつて夏の思い出多い海水浴場であつた。今子供たちは夏休みになつても遊び場を失い 家の中でテレビゲームに興じているが、健全に育つてある

うか。

漁業保障は金で解決しても、子どもたちに失われた海はもどつてこない。水野さんは今でも市議会に立候補したきつかけとなつた海の問題と子どもたちの将来を案じている。

おわりに

いつもそうであるがお会いする度に、先生の人間の魅力に圧倒され、お話しを聞かせていただきながらその歩まれた道の、あまりにもドラマチックな、想像を絶するご苦労の連続に胸をうたれ、何回となく熱いものがこみあげてきて絶句した。

一分先のいのちさえ保証されず、人として生きるすべての条件を否定された状況のなかでの母性、すなわち、生命を生み育てる性であるがゆえに出来た母親としてのすさまじい生きざまに、頭が下る。

今を生きる私たちに、この強い忍耐力と崇高なまでの精神力があるだろうか。

ある人は、「県会議員をおやめになつてヤレヤレですわね。」と云われたそうである。

「たしかに肩の荷はおりて行動的には呑気になつたけれど、まださまざまな仕事があるのですよ」とスケジュールをお聞きして驚いた。

『第六回地球を守る静岡女性の会』の総会も近々あるし、七月には「パラオ交流の翼」の団長さんとして、深い絆で結ばれているパラオへ旅立たれる。

ずっと以前のこと、加藤とよさんの発案で世界の核廃絶を願つて、アメリカ大統領宛のメッセージを送つたことがある。

三羽の折りづると一緒にピンに入れて、太平洋の黒潮にのせるために、東海大学の練習船「第二望星丸」に託されたという素晴らしいお話しを思い出した。

水野先生はいつも教師として、また女性議員としても大先輩の加藤先生のことをなつかしそうに話されたが、この原稿を半分ほど書いた頃、亡くなられた。

「私が葬儀委員長をやらせて頂くので、今からお宅へ伺うのですよ。」とおっしゃる先生の後姿が淋し気で、心中をお察ししながらお見送りしたこともあった。

思えば、私のような人生経験の浅い者に、ずつしりと重く長い歩みを繰り返して語っていただいている感謝の気持ちでいっぱいである。

自分の力のなさも省りみず、厚かましいことと知りつつのお願いであったにもかかわらず、快くお引受けくださったご好意を私は終生忘れない。限られたページ数の中に、先生の立派な足跡のほんの一部しか書けなかったことや、書き残したことのあるこれの思い胸が痛む。

心より重ねがさねお詫び申し上げたい。

参考文献

仏桑華は碧空に映えて

ある昭和史

流 民

脱出行

主権者としての女

ハイビスカス便り 県政連だより

朝日新聞 毎日新聞 静岡新聞

一億人の昭和史 N O 4

水野 シヅ著

色川 大吉著

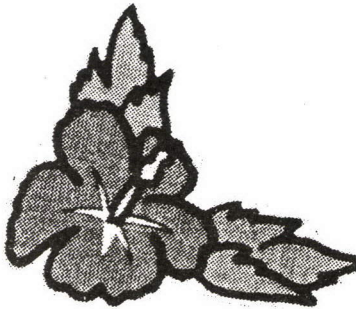
高橋 是人著

森 文子著

日本婦人問題懇談会 会報

紋の会かわら版

他



図説・結婚簡素化略史

小和田 美智子

2011

めに、あるだけの財産をつぎこみます。
娘が久しぶりにわが家に帰ってきたといろのに、両親とすからと言ってくる彼のことにすると、考えますけど、でも、今の私が一番愁ろし

先日、半年ぶりに郷里の岐

阜へ帰った。姉が今年三月に

結婚するわが家では、今、ま

さに春真った中……のはず

ですが、そう思うのは、岐阜

を離れ東京で一人暮らしをし

ている私だけ。現実には、戦

の真った中。岐阜では、

結婚となると、いわゆるあの

有名な「名古屋式」。とこの

家でも親が、子の結婚式のた

め、あるだけの財産をつぎこみます。

娘が久しぶりにわが家に帰ってきたといろのに、両親とすからと言ってくる彼のことにすると、考えますけど、でも、今の私が一番愁ろし

めに、あるだけの財産をつぎこみます。

娘が久しぶりにわが家に帰ってきたといろのに、両親とすからと言ってくる彼のことにすると、考えますけど、でも、今の私が一番愁ろし

めに、あるだけの財産をつぎこみます。

娘が久しぶりにわが家に帰ってきたといろのに、両親とすからと言ってくる彼のことにすると、考えますけど、でも、今の私が一番愁ろし

めに、あるだけの財産をつぎこみます。

娘が久しぶりにわが家に帰ってきたといろのに、両親とすからと言ってくる彼のことにすると、考えますけど、でも、今の私が一番愁ろし

めに、あるだけの財産をつぎこみます。

娘が久しぶりにわが家に帰ってきたといろのに、両親とすからと言ってくる彼のことにすると、考えますけど、でも、今の私が一番愁ろし

めに、あるだけの財産をつぎこみます。

娘が久しぶりにわが家に帰ってきたといろのに、両親とすからと言ってくる彼のことにすると、考えますけど、でも、今の私が一番愁ろし

郷里の嫁入り残酷物語

△……………△
両親。結婚式当日、家の二階

から箱いっぱいのお菓子を近

所の人たちにまく、菓子ま

き」という風習があるのです

が、そのお菓子をいくつ、い

くら分買うかで、相手方の彼

の家ともめているなど。

私にしてみれば、菓子まき

に十四、五万円も出すくらい

なら、新婚旅行をランク上

にするとか、考えますけど

でも、今の私が一番愁ろし

めに、あるだけの財産をつぎ

こみます。

東京の仕事
仲間に、この
ような話をす
があたりまえなんだと思ひ、
あのハチな結婚式ではしゃい
でいる同世代の若者たちだ。
あのしきたりはあつと何十年続
くのでしょわかねえ。

東の仕
仲間に、この
ような話をす
があたりまえなんだと思ひ、
あのハチな結婚式ではしゃい
でいる同世代の若者たちだ。
あのしきたりはあつと何十年続
くのでしょわかねえ。

東の仕
仲間に、この
ような話をす
があたりまえなんだと思ひ、
あのハチな結婚式ではしゃい
でいる同世代の若者たちだ。
あのしきたりはあつと何十年続
くのでしょわかねえ。

東の仕
仲間に、この
ような話をす
があたりまえなんだと思ひ、
あのハチな結婚式ではしゃい
でいる同世代の若者たちだ。
あのしきたりはあつと何十年続
くのでしょわかねえ。

東の仕
仲間に、この
ような話をす
があたりまえなんだと思ひ、
あのハチな結婚式ではしゃい
でいる同世代の若者たちだ。
あのしきたりはあつと何十年続
くのでしょわかねえ。

東の仕
仲間に、この
ような話をす
があたりまえなんだと思ひ、
あのハチな結婚式ではしゃい
でいる同世代の若者たちだ。
あのしきたりはあつと何十年続
くのでしょわかねえ。

東の仕
仲間に、この
ような話をす
があたりまえなんだと思ひ、
あのハチな結婚式ではしゃい
でいる同世代の若者たちだ。
あのしきたりはあつと何十年続
くのでしょわかねえ。

東の仕
仲間に、この
ような話をす
があたりまえなんだと思ひ、
あのハチな結婚式ではしゃい
でいる同世代の若者たちだ。
あのしきたりはあつと何十年続
くのでしょわかねえ。

東の仕
仲間に、この
ような話をす
があたりまえなんだと思ひ、
あのハチな結婚式ではしゃい
でいる同世代の若者たちだ。
あのしきたりはあつと何十年続
くのでしょわかねえ。

東の仕
仲間に、この
ような話をす
があたりまえなんだと思ひ、
あのハチな結婚式ではしゃい
でいる同世代の若者たちだ。
あのしきたりはあつと何十年続
くのでしょわかねえ。

（東京都練馬区
藤森喜江・会社員・24歳）

一、結婚費用七五四万円なり

一九九〇年六月二一日付の『静岡新聞』には、

前年度結婚した人の、婚約から新生活の準備までにかかった費用総額の平均を出していた。また前ページにあげた「ひととき」欄のように、驚くほどお金をかける地方もある。

地方による風習の違いに対してはひかえたいが、親がかりの結婚式はますます派手になっている。パブルの崩壊で、式にはお金をかけず、旅行や新生活にお金を回そうとする若い男女も増えており、結婚式のあり方を問いなおす時であろう。

現在私たちは、PKO法案が国会を通り、子どもたちが戦争にまきこまれる不安にかられている。こうした時、一五年戦争時には、庶民のささやかな子どもの幸せを願う結婚式が、自由に行なえなかったこと、式に関するこまかなことまで国家・隣組の規約があったことを多くの人に知ってもらいたい。以下、目でわかり易く追ってみることにする。

二、角隠しに白無垢かんざし

日中戦争前は簪も自分で買った！

米騒動とともに女性たちの間では、婦人参政権運動が盛んになり、女子に対して家庭および社会生活の改善・修養の必要を説く内務・文部両省推進による「生活改善同盟」が設置された（一九二〇年）。二三年には、戸主会・主婦会が設置され、貯蓄奨励・冠婚葬祭改善などがかけられていく。一九二九年（昭和四）にアメリカで起きた恐慌を打開すべく日本は満州に進出していき、「国民自力更生運動」が打ち出されていった。ここで結婚の改善が強調されていくが、一時景気が上むきになり、金持ちほど派手な式に戻っていったようである。

一九三七年（昭和一二）二月に結婚した高橋まつさんは、ちょうど一時景気がよくなった頃で、三ヶ日町にいたが結婚改善とか貸衣装の話は聞いたことがないという。分寸という村から、只木まで嫁ぎ、昼間分寸で式をあげ、夕方タクシーに乗っ



て只木へ行き、相手方で式・披露宴を行なった。
花婿は紋付羽織・袴、花嫁は白無垢・文金高島
田に角隠し、簪は自分で買った物である。この頃
お色なおしは少なかったが、披露宴で留袖にお色
なおしをしたそうだ。料理は仕出しを取ったが、

隣組も大勢手伝いに来ていた。披露宴は夕方から
夜が明けるまで続き、その間花嫁・花婿は座って
いた。夜が明けると近所の子どもたちに用意して
きたお菓子を配って、その後、姑と近所まわりを
した。三日目に、在所へ姑と婿・嫁の三人が泊ま
り（初客）に行き、その足で新婚旅行（
二泊三日）先の修善寺・熱海に向かった
という。

辻真澄子さん（当時三島在住）のお姉
さんは、日中戦争が始まって翌年の結婚
であるが、総柄の振袖で式をあげ、七棹
持って二週間のお披目をしたそうだ。

経済更生運動は、嫁入り先で娘が苦勞
しないことを願う親にしてみれば、最低
限の物は持たせたいと思うもので徹底し
ていかない。県下ではまだこの頃、結婚
の簡素化がいわれているのを知っている
人はあまりいなかった。

しかし世の中は大きく変わっていった
のである。東京・横浜では一九三二年八

月九日から三日間、関東地方ではじめての大規模な防空演習が行なわれていた。政府は「非常時」という言葉をさかんに使って人心の昂揚をはかるうとし、ラジオ・新聞でも「非常時」という言葉が使われていく。

三、角隠しと新婚旅行の廃止

一九三七年（昭和一二）七月七日、日中戦争が起き、国民は強力な戦時体制に組み込まれていった。一〇月、国民精神総動員中央連盟が結成され、その中で服装委員会が男子服装の成案をつくり、国民服制定の端をひらいている。

翌年国家総動員法が公布され、戦時に際し国力を全面的に發揮するよう、軍需品・被服・食糧などあらゆる物資を総動員物資とした。

国防婦人会では、五年間毎月一〇錢ずつ貯金し、脊椎病にかかっても一〇円の寄付を総本部へ行なつた会員を絶賛している（大日本国防婦人会総本部『日本婦人』第六二号）。以後耐乏生活に加え、

貯蓄が大運動にすえられる。

国民精神総動員委員会は、「公私生活を刷新し戦時態勢化するの基本方策」（一九三九年）を決めた。この中で、

冠婚葬に伴ふ弊風打破就中奢侈なかんづくなる結婚披露宴等の廃止。

が強調され、パーマネントも禁止された。

これに答えるかのように、『主婦の友』一〇月号では、「戦時下の模範結婚式実演大画報」と特集を組んでいる。花嫁の晴れ姿は文金の高島田に、留袖と調和を見せて角隠しは廃止。

婿の服装は、モーニングの新調は断然止めて、背広に儀礼用の、凛々りんりゃしい非常時姿。ズボンだけ縞にするのもよろしいでせう。来賓の服装も、自然に簡略になつて結構です。

とある。式だけ自宅であげて、披露は宴会場・公会堂などで手軽にすませることも盛んになつてきたようである。新婚旅行もとりやめをすすめている。料理も、別室でサンドウィッチにカステラの



(『主婦の友』1939年10月号)

写真入りである。

このころすでに大日本国防婦人会は、会員数九〇〇万人を越え、静岡支部の修養会に会長武藤能婦子が訪れ、訓示を述べている。

この後、静岡地方本部副長中田雅子は、国婦人の生活の刷新すなわち、貯蓄の奨行、ぜいたくや虚礼廃止への決意を固めていく。

一九四〇年に



(『日本婦人』71号)

最简单
模範嫁入り



「一人で大丈夫かしら」
「大丈夫さ荷物は何も
ない貯金帳一ツだもの」

施行された「奢侈品製造販売制限規則」によって、「ぜいたくは敵だ」のスロ—ガンが庶民に浸透していった。しかし規制の効果は上がらず、商工大臣は、イタリヤ・ドイツを訪問し、切符制度や灯火管制を学んできた。

「我が国は上御一人を家長として戴き奉る一大家族であります」(『週報』二〇一号)と述べ、この提起をうけて、九月に近衛内閣総理大臣は、「新体制について」と声明を発表した。生活の新体制として、精動本部決定「冠婚の新様式」も発表された。ここでは式服だけをあげてみよう。

式服は团服または制服、花嫁は振袖以下とし、花婿はなるべく平服に儀礼章を。色直しの弊風を除去とされた。そして式場では必ず宮城遙拝を行ない、祖先の霊に報告することを忘れてはならないとされた。

個人のことをこうした国家が規定するには理由があった。「根本に於ては精神問題ですね。贅沢なことをしないといふことが一つの習慣になり、一つの誇りとなること」、「個人本位の気持をすてて、国家のため、全体のために吾々の生活を立てて行くのである、という覚悟」を打ちたてるためと規定しているように、国民を精神的に戦時体制にとりくむ必要からであったのである。

徹底化する方策として、隣組・部落常会、あるいは、男女青年団や各種婦人会、官公署・会社な



(『主婦の友』1940年10月号)

どあらゆる組織
で申し合わせを
していくことに
された。

しかも申し合
わせにとどまら
ず、違反した者
には仲間の制裁
をすすめている
のである。

『主婦の友』
一九四〇年一〇
月号では、「精
動本部指導新体
制下の模範結婚
式」を特集した。
花婿が、花嫁
共々団服・制服
ならば、見るか
ら凛々しい非常

時型の新郎新婦となりませう」とそえてある。

九月に出された「部落会・町内会・隣保班・市町村常会整備要綱」で、すべての世帯が一〇戸単位にきめこまかく組織化された。冠婚葬祭など一切隣組が処理するようになり、規制が徹底されていく。

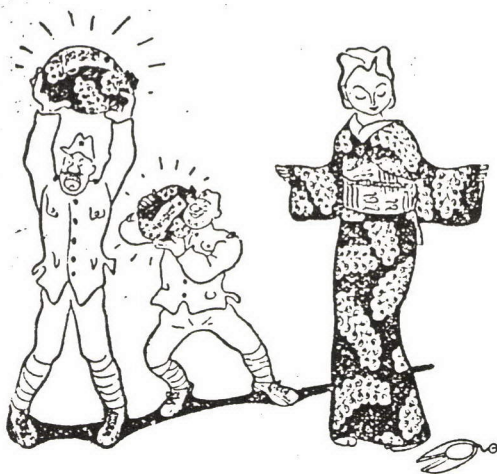
まだ景気がよかったという頃（一九四一年）に結婚した佐藤あつ子さんは、岡部から静岡にタクシー（木炭車）で嫁いできた。簡素にということでは喪服に決められていたので、家を出るときは喪服で、静岡に着いてすぐ振袖（黒色で袖に少し柄のあるもの）に着替えたという。かき屋に料理を頼み、近所にも料理を配った。どんな料理かで祝言の評価が決まるので気を使ったそうだ。

日中戦争も長びき、物資不足は深刻となる。貯金と公債の買求めをすすめ、平時の二倍も三倍も働くことや副業を奨励し、冠婚葬祭も質素に、兵の送迎も質素にと提言されてきた。

戦死が増大し「人口政策確立要綱」（一九四一年一月）が閣議決定された。これは大東亜共栄圏

を確立して、日本人がアジアの支配者となるため、優秀な子どもを多く生み育てる方策であった。今後一〇年間に平均結婚年齢を三年早め、一夫婦が平均五人の子どもを生むために、男子二五歳、女子二一歳までの結婚が奨励された。

長袖をちょきんと切って慰問袋に



（『主婦の友』1940年10月号）

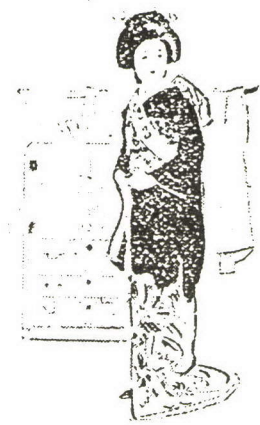
結婚の簡素化は、常に生活刷新の精神運動だけではなく、人口政策すなわち「生めよ殖やせよ」という人的資源確保のため、若い人たちが積極的に物がなくても結婚できるためにも重要な政策として遂行させる必要があったのである。

四、国民服とモンペの結婚式

一九四一年（昭和一六）一月八日、日本はハワイ真珠湾攻撃とマレー半島の英領コタバルに奇襲を行ない、太平洋戦争に突入した。この年の日米の重要戦略物資生産比は、一対七七・九であったという。

翌年二月、愛国心を競っていた愛国婦人会・国防婦人会・連合婦人会の三団体は、争っている時ではないということで、閣議決定で統合され、大日本婦人会（日婦）となった。日婦はそのまま大政翼賛会に加わり、廃品回収・貯蓄増強など戦争協力をしていく。

「結婚は一種の応召という覚悟がなくてはなり



『主婦の友』
(1942年11月号)

ません」^{かぞ}「かゝる応召の首途に筆筒や着物が果して何ほどの役に立つものでせうか」と立華高等女学校長細川武子は語っているが（『主婦の友』一九四二年一月号）、先方との関係で娘が嫌な思いをしないため、親たちは必死で集めるのである。もうこのころには、鍋や釜を買うのが大変で苦勞したと山口キミさんは語っている。

世間では人口増強がもつぱら結婚の使命という風潮となるが、人口増加は思うほど延びていかない。

国民優生連盟では、「優生結婚資金」の貸付けをはじめた。また戦争下における美は、簡素の美であるとされ、モンペ姿の美しさが強調される。

はてはモンペの結婚式も、新聞などで紹介されてきた。

人口増強政策のための早婚奨励と物不足下の決戦衣生活を支えるために、大日本婦人会の果たした役割は非常に大きかった。

日婦は部落ごとに班をおき、班内の必勝国民貯蓄組合の実行委員が貯金を集めて通帳に記入していく。結婚式や葬式などのたびに費用を減らして貯金した例、お嫁さんの挨拶廻りをやめて部落常会に寄付した例などがでてきた。

「兵は攻め 銃後は貯めて 勝ちつづけ」のスローガンも出され、日婦は「戦時衣生活生活実践申合せ」を行なった。

静岡県下でも旧衣類切符の自発的献納運動に加わり、なかには結婚費用の五〇〇点をそのまま差出した人もある（『日本婦人』一九四三年六月号）。

しかし戦況は悪化する一方で、山本連合艦隊司令長官が戦死し、アッツ島では玉砕した報が入った。撃ちてしまんの意気は、日婦会員の心に強



日婦会員の集まりの様子。右側から左へ、山本連合艦隊司令長官の遺像、伊藤海軍大臣の遺像、日婦会員の集まりの様子。右側から左へ、山本連合艦隊司令長官の遺像、伊藤海軍大臣の遺像、日婦会員の集まりの様子。

婦人総躍起

下村敏太郎閣僚の逝去に際し、日婦会員の集まりの様子。右側から左へ、山本連合艦隊司令長官の遺像、伊藤海軍大臣の遺像、日婦会員の集まりの様子。

緊急全国支部長會議

日婦会員の集まりの様子。右側から左へ、山本連合艦隊司令長官の遺像、伊藤海軍大臣の遺像、日婦会員の集まりの様子。



くもり上がっており、「戦場精神の昂揚」のため伝統の日本婦道が奮起して湧きあがるべきだとし、一九四三年六月一八日、緊急全国支部長会議を開催した（『日本婦人』八月号）。

決起集会の後、静岡県支部はまず七月六日の賀茂郡を振り出しに、県下一五カ所で国防修練指導者錬成会を開催。一町村二名ずつの幹部約七〇〇名が参加した。

家庭生活の必勝体制確立をめざし、生活簡素化等を常会・講習会を通じて県下全会員に呼びかけ

乗へ
必勝生活指導委員決定

日婦同業支部では、さきに空のお暇さん部隊を組織して土曜航空隊に一日入隊を試み、(空へ)「土を」の総隊員訓練を行ひ決意の誓いに努めたが、今度は家庭生活の修練指導員として必勝生活指導委員五名を選定、食生活、祝祭、園芸その他の共同訓練、生活

日婦同業本部の大東亞慰勞刷新

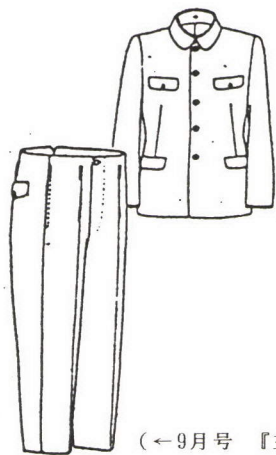
簡素化等を常会、講習会を通じて県下全会員に呼びかけ、祝祭、園芸へ決意を確立に邁進することになった。

六反歩の軍引奉仕

日婦高知縣高岡郡東窪野村支部では、山内支部長以下会員は六十名が懇話会前に努力奉仕し六反歩の取組を行つて、大いに感謝された。また香美郡夜須町支部では此際班長會を開催、懇話会中合せの實行を協議、祝祭園芸指導も近

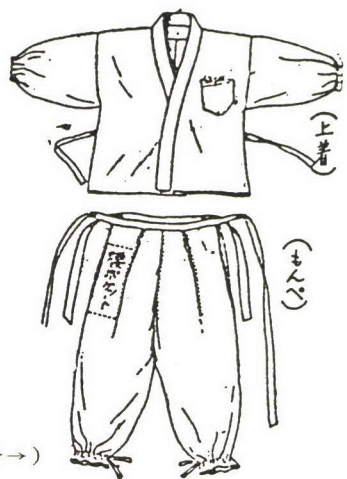
(『日本婦人』1943年11月号)

国民服



(←9月号 『主婦の友』 10月号→)

もんぺ



婦人標準服甲型二部式

同乙型二部式



大日本婦人会
会員制服

(『日本婦人』1943年4月号)

ていった。短袂、モンペの着用はほとんど普及していた。

東山口村（現、掛川市）では九月、生活改善の誓約書を取り、各戸ごとに署名捺印させている。これは、精動本部から出された「冠婚の新様式」の、祖先の靈に報告、日婦本部が唱えた婚姻届の当日届、結婚費用を貯蓄し国債にかえた日婦の運動などをとり入れて、とりきめている。服装も男子は国民服を、女子は婦人会服および標準服を指定している点は大きな変化である。

国民服令は、一九四〇年に施行されており、東亞諸民族を指導するに足る新服装文化を確立すべきとして制定されたもので、色は茶褐色（国防色）に限られ、これにつける儀礼章は八紘一字を形象化したものである。

和服が主である女子の場合は、国民服としては成り立ちにくかった。しかし国防色に包まれた男子に比べ華美に映る女子も、決戦体制下、是非必要ということ、一九四二年厚生省が婦人標準服を制定し、日婦も制服を制定してきていた。

一九四三年（昭和一八）は、婦人標準服・制服・モンペの徹底普及運動に全精力が注がれていた。「袖切り運動は日本婦人の歴史の大事業」として街頭で声をかけ（高知県）（『日本婦人』一九四四年二月号）、長い袖は「非国民」の風潮となっていく。

「非国民」という言葉は非常に庶民にとって恐ろしい。このころには、「戦時生活様式」総体から逸脱したものは、「非国民」という異端の扱いを受けるようになっていた（『裾野市史研究』第四号）。

一九四四年（昭和一九）には、インパール作戦などの失敗から、本土爆撃へと戦局は急展開していく。三月から「決戦非常措置」がとられ、国民生活はさらに戦争協力への態勢を強制された。

日婦も、「会員はただ一途に、大君のため死して悔いなき前線将士の覚悟をもって、各々の生活が即ち戦争であることを考へて、互いに助け、総力を結集して皇国にささげようとよびかけた。

生活改善はもちろんであるが、貯蓄と、人口増



貯蓄



（『日本婦人』1944年4月号）

加のための結婚奨励（特に拓土等の花嫁幹旋）が強調された。

この年になると、静岡県下でもモンペ姿で結婚する人があらわれた。辻真澄子さんの友だちは、わざわざ喪服をモンペに作りなおして着、髪に花をつけて写真をそっと写した。周囲の目でそうせざるを得なかったそうだ。

辻さんの母親もこの当時仲人をやっており、留袖を持っていても紋付きの着物をわざわざモンペにして出席したという。

麻機の女子青年団長の結婚はモンペ姿で、荷物
は驚くほどなかった模範的な結婚式だと当時評判



になったことを、佐藤ふじ子さんは語ってくれた。結婚の簡素化をその村でとりきめても、他村へ嫁ぐ場合、嫁ぐ女の立場は非常に苦しいものとなっていた。それが金持ちの場合は、皆の目に触れない貯金や国債という形で持っていくことができ

るため、負い目になることはなかったであろう。ましてや、女子青年団長であれば、自ら実践すべき立場であったので、しないわけにはいかなかったであろう。

一九四五年（昭和二〇）一月、大阪・名古屋・東京が空襲を受け、大本営は本土決戦基本構想をまとめた。

各地が空襲をうけ敗戦の色が濃くなってきた六月、榎原幸子さんは、三ヶ日町からお隣り愛知県富岡村に嫁いだ。空襲がいつあるかわからないので、花嫁をはじめとしてみなモンペに草履で、歩いて七キロメートル先の婿方まで峠を越えて行った。嫁入道具もすぐ必要な衣類・衣装缶と鏡台しかそろえることができず、鏡台は姉がしょって歩いたのである。

花嫁は姉から借りた留袖を着、花婿は国民服を着た。料理は親戚が作って待っていてくれ、親兄弟姉妹だけの式であっ

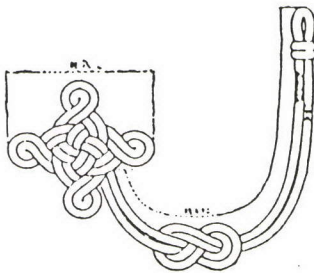
た。

式直後に敗戦となり、タンスを親戚から買い、ミシンをお米ととりかえたりして嫁入り道具はトランクで運ぶことができたそうだ。

男性の国民服は徹底できていったが、女性たちの場合は、村と村との関係、嫁ぎ先との関係、何よりも娘の晴れ姿を見たい親たちは、いくら生活刷新だといわれても受け入れられない。常会で、婦人会で言われても忍びなく、留袖での結婚だけは譲れなかったといえよう。

標準服で、あるいはモンペでしかないからといって、「非国民」扱いはすることはどの親もなれなかっただろう。またそこまで徹底しない内に敗戦となったのかもしれない。

結婚式の服装やあり方は、個人の自由で決めるべきことである。女性にとって、戦争ということ、国家・婦人会・隣組で規制されるつらい思いはしたくないものである。



国民服留袖

北海道開拓農家の母

溝口タミのこと

縄 唯美

はじめに

一九〇九（明治四二）年十月「タミ」は、箭原和七・ツエの次女として北海道の上川郡新十津川にて生まれる。

和七もツエも、子供の頃に親に連れられて、富山県の『となみ』という所から、北海道開拓団の一員として新十津川に入る。ツエが七才の時だったというが何年の年かわからない。

北海道は内地の至る所から開拓団が入っていて、内地の名前をそのまま付けて、秋田部落・栃木部落等が、今でもそのまま残っている。四国・東北・日本海側の人達が多い。

屯田兵と北海道開拓団は少し違う。



一八七四（明治七）年に北海道屯田兵制度が作られ、その時はいった人達は多少なりとも政府の保護があったようだが、開拓団は民間の組織の中で集められた人が多いという。

内地にいてうまい話だけを聞かされて、大勢の人が新天地を求めて北海道の人になつてゐる。

「お国はどこですか？」が挨拶代わりになつていて、故郷が同じならそれだけで身内のようつきあいをしていた。

交通網の悪い時代に、錦を飾つて帰る男は良かったが、多くの人は一生故郷を見ることなく、北海道の土になつてゐる。ツエも「となみ、となみ」と懐かしがつていたが、一度もとなみへ帰ることがなかつた。

北海道へ渡つた人達の情報源は富山の薬売りの人達である。富山から何人も薬売りが入つていて、多い家では一〇箱も置いてある家もあつて、年に一度取換えにくる。その人達は日本中を回つていて、新聞もラジオもない部落へ内地の出来ごとを知らせてくれた。みんなも楽しみに待つてゐる。

一九〇九（明治四二）年

伊藤博文 ハルビンで暗殺される。

一九〇八（明治四一）年

歌人 山川登美子

一九〇九（明治四二）年

詩人 大塚なお子

一九一一（明治四四）年

無政府主義者 菅野スガ 亡くなる。

菅野スガは「自分が死んだ時は、婦人革命家の第一号として賞されるべきもの」と確信して、死刑執行直前に「・・・万歳」と叫び、二九才で散つたという。「大逆事件」はスガを含む一二名の死刑執行を、たった二日で終えて決着を付けた。ツエは内地の出来事より、自分の生活を守る事で精一杯だつたらう。

タミの上に兄二人姉一人、下に弟三人いて、タミは末の弟をおぶつて学校へ行つた。

学校にはそんな子供が何人もいたという。

タミが一四才の時、父親の和七は酒を飲んで路上で凍死した。ツエは苦勞して開墾した土地を捨

てて、和七が死ぬ。すぐ子供達を引き連れて、ツエの兄を頼り、温根湯オンネユへ移り住む。

いとこと結婚

一九二九（昭和五）年に、タミは二三才で従兄の溝口佐平と結婚した。

病弱の左平は三〇才になっていて、あの時代では二人共晩婚といえる。

佐平の母親と、タミの母親ツエは姉妹になる。

タミは叔母に泣きつかれて、断り切れずに結婚したという。

タミには、結婚話が幾つもあつたが、弟たちの面倒を見ることが、母親ツエの我が儘から兄嫁とぶつかりあうのを見ていて、結婚したくないと思つていたらしい。

佐平はからだが弱くて、農作業はおろか、日常の雑用も一人前の仕事ができなかった。

タミは結婚式に初めて会う夫が、どんな人かはまったく知らずに一緒になる。

佐平は年よりもずっと老けて見えて、何時もいえに出入りする人が何年も「ツエと佐平は夫婦だと思つてた」と後で笑い話になつたくらいだから、それだけでも佐平のことが想像できる。

農作業、家事、育児、近所付き合い等一切を、タミがやつていくことになる。

佐平は気が進めば田畑へ出て手伝うが、二時頃には鼻血を出してしまうので、仕事を頼みたくても頼めない。涼しくて調子のいいときでも、稲とちえを間違えて稲を抜いたりするので、タミは忙しくて手の欲しいときでも、「父ちゃんをあてにする」と腹が立つ」と結局自分でするようになってしまった。

佐平は気が向いたら畑に出て、気が向いたら家でお経の本を読んでいる毎日の生活に、誰もが私の佐平と呼んでいたが、半分は馬鹿にしていた。

「子供もできないだろうとみんなが思つていたらしくて、長男が元気で生れた時は大喜びだったよ。本家のおばが父ちゃんのことを褒めていたけど、私が丈夫だったからだよ」とタミは少し不満だっ

たようだ。

一九三二（昭和六）年の春に、佐平夫婦は土地を買って分家する。前の年が豊作だったので借金してもすぐ返すことができるだろうと思っただけ。分家してから四年間の間に豊作は一度だけで、約束通りのお金が払えず、一九三五（昭和十）年には折角手にいれた土地を手放して、小作人になる。

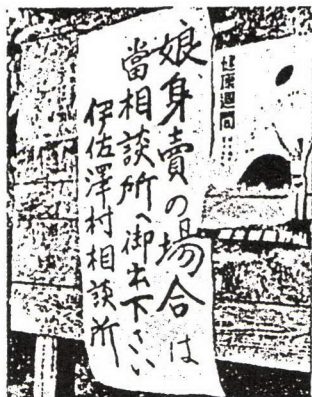
二人には、長男四才と長女二才が生れていた。タミは小作人として働き始めた。土地を借りて収穫の何割かを年貢として納めるのだが、土地が肥えていて、作物の出来は良かった。

一九三九（昭和十四）年には次男が生まれて、タミはいっそう忙しくなる。

佐平は相変わらずの毎日で、それでも医者へ行くこともなく

「それはそれで有り難いと思っていた」という。一九四一（昭和十六）年に、世話をしてくれる人がいて、佐平は郵便局に入れてもらう。

少ない給料でもタミには佐平の働いてくれたお



▲東北地方の娘身売り相談所 1930 (昭5)年



▲飢えて大根をかじる東北地方の子供たち 1933 (昭8)年11月

金だ。「始めの給料は勿体なくて使えなかったね、暫く仏壇にあげておいたけれど、いつの間にか使っちゃった」と話していた。現金が手にはいる時代ではないので、よほど嬉しかったらしい。「父ちゃんを大事にしなればと思ったね」とその時の嬉しさを後で話してくれた。

北海道も段々戦争の色が濃くなって、タミの弟も、一人は戦争、一人は満州へ行き、下の弟は病死して、タミは心細い思いをした。

夫・佐平は徴兵検査に不合格で、元氣な男達から馬鹿にされたりしたが、タミは不合格を喜んで、それも話題の種になり、お巡りさんも街であつてもいい顔はしなかったという。

タミは戦争の激しくなつた一九四二（昭和十七）年に三女、一九四四（昭和十九）年に四女を出産している。二女は生まれてすぐ他界した。

北海道でも防空壕を掘り始めたが、タミは、「そんな暇が会つたら、草取りをしていたほうがいい」と、作らずにいた。「こんな田舎まで敵がくるんなら、防空壕を掘つても負けちゃうよ」と、

言っていると戦争が終わつて、「ワシの勝ちだったね」と一人悦に入つて、カアちゃんにはかなわんね、と近所の男達もタミを認めるようになった。それまでは、部落の常会に出ても余り意見を求められなかったが、防空壕の一件があつてから、常会でも話ができるようになった。

農地改革でごまかされる

一九四六（昭和二十一年）二月、第一時農地改革が行われて、タミもやっと自分の土地が持てるようになった。

小作人でつくつていた土地をそのまま動かずに割り当てられることになつていた。タミが耕していた場所は、平地の黒土で何を作つても穫れるところである。だから、女の力でも年貢を払つてやつてこられたのだ。

タミはあの土地が自分のものになると思つと、嬉しくて夢を見る気分だつたらう。

話は始めから決つていて、後は書類を作るだけ

だ。いつもの集まりは、タミがいつていたが、その日はどうしても用事ができていけなくなった。タミは佐平に今までのいきさつを詳しく説明して、「今日は印を押せばいいだけだから、あの土地以外のところなら印を押したら駄目だよ。今のあの土地が、ワシのものになるのは始めから決まっています、みんなが承知しているんだから」と念を押して、佐平を送り出した。

佐平が帰って来るのを待ち構えて様子を聞いたら、佐平が印を押してきたのはまったく別の土地である。

タミは怒って「どういうことか」と佐平に聞くと、「あの土地は〇〇さんのものだよって。ただで貰うのに文句が言えないから、黙って印を押してきた」と言う。

タミは「みんなは、あの土地がワシのものになることを知っていて、何にも言わなかったか」と佐平に詰め寄った。「〇〇さんが話をしているとき、みんな黙って下を向いていた」と言って、その場の様子を説明した。

136 戦後の経済的改革

1 農地改革

●農地改革の要点

	第1次農地改革	第2次農地改革
不在地主	認めない	認めない
在村地主	隣接市町村在住者を含め、5町歩内	農地のある市町村に在住する者
面積計算単位	個人単位	内地1町歩(北海道4町歩)
自小作地の制限	なし	世帯単位
譲渡方式	地主・小作農の協議	内地3町歩(北海道12町歩)
農地委員会	地主・自作・小作各5名	国家買収、小作農へ売渡す
小作料	金納(物納も可)	地主3・自作2・小作5名 金納、最高限度 25%まで

●農地改革の成果

(農林省統計局資料)

自作地	1938年(昭和13)	自作地 53.2%	小作地 46.8%
と	1949年(昭和24)	87.0	13.0
小作地			

▼農地改革のポスター

農林省によって作成され村々に掲示された。



「だから行くときあれほど言ったのに。みんなで弱いものを馬鹿にして。ワシがいつて取り消してくる」と言つて、〇〇さんの家へ直談判に言ったが、「父ちゃんが承知して印を押したのだから」と言つて取り合つてくれない。

後で知つたことだが、地主と〇〇さんが勝手に決めたことで、何にも知らない佐平が出席したのだから、簡単に丸め込まれたようだ。

「あんたがたがいたのだから、話が違ふといつてくれれば良かったのに」と近所のおじさんたちを非難したら「そんなこと言つたら、その矛先はこっちに回つてくるから誰もなにもいわんさ。カアちゃんには悪かつたけど」と言う。

結局、タミはその土地で泣き寝入りとしたが、翌年の第二次農地改革でも、取換えてもらうことができず、苦勞することになる。

それでも自分の土地を持つことができた。タミは今までも増して働きたした。

一九四六（昭和二二）年の春、タミの弟が南方でマラリアにかかつて復員してきた。

家に着いた途端に、寝付いてしまい、その弟の子供も嫁の実家から「伝染病にかかったから」とタミの元へ連れてこられた。

「いえにも小さい子供がいるのに」とタミは腹が立ったが、そのまま家で面倒を見ることにした。

タミの狭い家には、タミの弟とその子供、具合の悪い長女、マラリアが移つた三女と、忙しい時期に病人が四人もいて、中には何とも言えない鬱氣になり「氣持ち悪かつた」と後で思い出して話していた。

タミも疲れて、一時はどうなるかと思つたが、長女と三女は元氣になり、タミの弟とその子供が十二月に相次いで他界した。

この年はみんなに助けられて作柄も良く、無事正月をむかえることができた。

タミは瘦せた土地を少しでもなんとかしようとして、子供達を使って、川の掃除、畑の石拾いを始めた。雨が降ると畑の半分は水についでしまふ。

川の流れを変えなければと、一人頑張つて、川の中へ入り掃除を試みるが、雨が降れば何時も

同じように作物がやられる。

「父ちゃんが騙されて印を押すからこんな事までしなければならぬ。○○さんのあの土地はあんなに作物が出来ているのに」と佐平を責めても知らん顔で、タミは一段と声が大きくなる。「自然に逆らってもどうにもならぬ」と言う佐平を「当てにしていたら腹が立つ」とタミは自分で役場へいき、「川の流れを変えてくれるように」と頼んだ。

部落の中で水害に遭うのはタミの所だけなので、役場も部落の人を取り合ってくれない。

タミは水がつくと区長さんや役場の人を引っ張ってきては、様子を見てもらった。

家は少し高いところに建っていたので、水が上がる心配はなかったが、子供達はボートに乗って西瓜やカボチャを拾ったりして、そんな様子を見た部落の人が働き掛けた、何年か経ってから役場で川幅を広げてくれた。

川が少し良くなったら、今度は畑の石拾いだ。まだ小さい子供を畑へ連れていき、自分は草取り

をしながら、子供には石を集めさせる。

小さな石の山を作らせておいて、タミが畑を上げる時に道路へ出して行く。

田畑の仕事が少し進んでいるようなときは、藪原を開墾していく。

タミは、佐平に「そんな山陰を開いても畑にならない」と言われながら、子供達を使って畑にしようとして頑張った。

夏でも長靴のいるぬかるみで、馬も入れないので、木を切って運び出す事から、切り株を掘り起こす作業、笹の根を取り除く事まで全部手作業だ。長男に少しでも多くの田畑を残してやりたいと、何ごとも根気良く続けた。

この頃は北海道でもまだまだ戦争の傷跡が残っていて、いろいろな人が来た。

子供だけの家になり込んで、お櫃を空にして「まだ足りない、隣へ行って持ってこい」と大声を出す人もいた。

「網走刑務所から囚人が逃げたから、家から出ないように」と連絡が入って、三日ぐらいして「美

幌で掴まえた」ということもあった。

このときはタミも「ここまでは逃げ切れないだろう」といつていたが、藁小屋に男が寝ていたときは、恐ろしくて隣のおじさんと呼んできた。

お坊さんの身形をしていた人は、頼まれると押んでいたが、それで近所から注意されたこともある。

それでもタミは佐平から言われれば、弁当まで持たせてやっていた。

朝鮮戦争が始まる

一九五〇（昭和二五）年に朝鮮戦争が始まると、北海道も少しずつ活気を取り戻してきた。

材木が内地へ運ばれて、東北のほうから出稼ぎの人が入り、炭鉱の街の人口もどんどん増える。

温根湯にも『イトムカ鉱山』といって、水銀の鉱山があり、内地からも大勢きていた。

今はもう廃坑になっている。

農家も豊作が続いて景気が良くなっていた。

十二月に入ると、豚を殺して正月用に隣近所に分け合うようになった。

秋になると「今年はこの豚を漬そうか」と早くから決めて、急いで太らせることもあった。

外がしばれると作業に掛かる。

自分の家で欲しい分だけ「足一本」とか「足二本」「肩のところ」とか言って、一頭で足りない、また別の家の豚を殺して分けた。

殺す（さばく）人は、内臓を全部貰うことができるので、器用な人は十二月中に何頭も頼まれては、それで正月の御馳走がたっぷり出来た。

タミの家では、タミはもちろんのこと、佐平もいきものを料理することは出来ない。

ヨタヨタしている鶏がいると、隣へ持っていく、笹身を二枚ほど貰ってくると喜んでくれるから、自分の飼っている豚を出すときなどは二人で悩んでいた。

十二月の共同作業のようなもので「可哀相だから出せない」と言えないし、そんな時は自分で欲しい分は他から買ってきて食べたが、それも

笑われる種になった。

餅つきも大仕事の一つになる。

佐平は力もないので、タミの家では餅つきまで人を頼むのだが、一俵もつくときは大変だ。

何もできない佐平は、ただうろうろしていて、やっぱり笑われることになる。

少し後になって、ジンギスカンが流行り出す。

殺してすぐの生肉は刺身で食べることもできるが、大体は焼いて食べる。

野菜や果物を擦り下ろしてタレを作り、付け込んで旅館へ売りにいく人も出始めた。

北海道の冬は、出稼ぎをする人も少ない。

一年分の燃料を用意しながら、このジンギスカン作りが、また楽しみの一つに変わってきた。

ある年の春、タミの家で二晩続けて綿羊が野犬にやられた事があった。

夫婦は「可哀相だ」と言っ、二頭とも穴を掘って埋めて「子供達に内緒にするように」と口止めをしていた。

一週間程過ぎて、隣のおじさんが「カアちゃん

とここで綿羊が二つ足りないぞ」といいにきた。

「野犬にやられた」と話すと「その肉どうした」と聞かれて、埋めたことがばれてしまう。

「カアちゃんの家では子供に嘘を言えと教えているのか」と怒られて「掘り起こす」と言ったが、一週間も過ぎていては駄目だろうと諦めて帰っていった。二人は今度は「野犬に掘り起こされないように」とそのうえにまた土を被せていた。

大工に夜逃げされる

一九五三（昭和二八）年、タミは待望の家を建てることになった。

冬から間取りを考えたりして、五月には建て前も済ませるのだが、佐平はまた大きな失敗をした。タミは蒔付けと建て前が重なって、忙しいからと、街への用事は佐平に頼んでいた。

大工さんも「××さんを頼んできてね」と言っ、切り返みを始めた。

少し仕事にきただけで、一週間もこない。

始めは用意でもできたのだろうと思っていたが、佐平に様子を見にいったら、

「材木が足りなくて仕事にならないそうだ」と佐平は帰ってきて言う。

タミは「始めに材木費としてお金を渡してあるのに、材料もまだたくさん残っているけど」と思いつながら、それでも佐平が言われてきた金額を用意して、佐平に届けて貰った。

「明日は材料を買いに行くのでこれないが、明後日からくるといっていた」と佐平は言う。

タミは農作業を家の回りに切り替えて、大工さんの来るのを待ったが、何日待っても大工さんはいかない。

「父ちゃんの話だけでは様子が分からない」とタミは自分で行ってみることにした。

大工さんの家は空っぽで人の気配がない。隣にいった様子を聞いたなら「一週間前に夜逃げしたよ」と言われた。

何処にいったのかと聞いて見ても、誰も夜逃げ

する人の行き先を知る筈がない。

一週間まえと言えば、タミが佐平にお金を渡した日になる。

またしても佐平は騙されたのだ。

タミは、家に帰ると佐平と大喧嘩になった。

「今度の大工さんだって、みんなの言うことを聞かずに、父ちゃんが勝手に決めてきて」と佐平をなじるのだが、佐平のほうは「夜逃げするぐらいだから余程困っていたんだろう」と呑気な顔をしている。

タミの腹の虫は治まらない。

「一生懸命働いて溜めたお金を、簡単に騙されて、何処まで騙されたら気が済むのさ」と幾ら佐平に食いかかっても他人事のような顔をしていて、タミの気持ちに答えようとしない。

「そんなに腹を立てても、金が戻ってくるわけではないから」と言う佐平に、タミは今度は自分で他の大工さんを頼んできた。

「このままにしておくわけにはいかなから、別の大工さんに頼んできたよ」というと、佐平は

「気の済むようにしたらいい」と言う。

だが、お金を持ち逃げされた話はみんなが知っていて、今度の大工さんも、タミの弱味に付け込んで「賃金のほかに晩御飯も出してくれたら」と言う条件付きになった。

タミは、お金の掛かることだし佐平に相談すると、「晩飯ぐらい出してやれ」と言う。

タミは農作業をしながら、家の出来上がるまで夕食も作ることになる。

一度、二度、三度と大金を出すことになって、タミの虎の子もスッカスカンになった。

この年はまた、春の蒔付けから寒くて、そのうち暖かくなるだろうと思っていたが、田植えの時期には畔道で火を燃やすほどだった。

毎日、毎日霧がかかって、七月に入っても植えのままの状態だ。

この頃はまだ、北海道も全部手作業なので、田植え等は何処の家でも、一ヶ月はたっぷりかかる。

このままでは来年は草に負けるからと、みんな水を落して、田んぼを耕し始めた。

タミの家では、長男が農作業を手伝うようになっていたが、佐平の替わりに郵便局の仕事をやるようになり、たんぼは人に頼んで耕してもらうことにした。

タミは三重の支出になって苦しいやりくりだ。

それどもお盆には新しい家ができて、タミには春の嫌な出来事も忘れて、幸せな気分を味わうことができた。

友達も呼んだりして、三日も仕事を休むのはお産以来のことだろう。

春の低温で秋の収穫は不作に終わったが、念願の家もできて、タミには良い年であったろうと思われるが、後でタミの体を悪くする原因になる。

一九五四（昭和二九）年三月、焼津のまぐろ漁船「第五福竜丸」が死の灰を浴びる。

このニュースは北海道の田舎でも、おおきな話題になって、タミも不安な気持ちにさせられた。

タミの弟が戦争にいったまま、まだ生死不明でみんなで心配している最中だった。

「また、戦争になることもないだろうが、北海

道は船で遠くへ魚を取りにいく人も多いから」と、
氣にして佐平に意見を求めたりしていた。

春になって忙しくなると、去年の不作を取り返
そうと、夢中で働く。

この年は豊作で、去年の家の借金も少し返す事
ができて、タミはほっと一息ついた。

一九五五（昭和三〇）年、北海道はこの年から
大凶作が続く。

この年はタミにはまた、嬉しくて悲しい年にな
った。

長男が三月に結婚し、その一週間後に次男が中
学を卒業して大阪へ就職した。

これは佐平が、戦争中に大阪から疎開してきた
人との約束で、「次男が中学を卒業したらあなた
の所へ奉公に出します」と、決めていたものだ。

タミは、子供を遠くへ出すことに反対だったが、
佐平が「男と男の約束だ」と行って撤回しようと
せず、タミも嫌々ながら出すことにした。

次男が玄関を出る時は、笑顔で送ったタミも、
すぐ姿が見えなくなったので、みんなで捜すと家

の陰で声を上げて泣いていた。

それからのタミは、口癖のように「子供を遠く
へ出すもんでない」と、誰彼構わずいうようにな
っていたが、次男は想像以上の苦勞をすることに
なった。

後で分かったことだが、佐平は利用されていた。

働き過ぎて病気になる

タミは次男を手放した寂しさを、働くことで忘
れようとしていた。

朝の明けぬうちから外に出て、夜も手元が見え
なくなるまで外で働く。

それでも夜寝ながらまだ泣いている。

「借金してでも土地を買って側に置けば良かった」
と後悔していたが、道東の農業は土地がたくさん
なければ、農業としてやっていけない。

凶作が続いたら借金を抱えたまま、土地を置い
て離れなければならぬ。

タミが次男の分家を考えても、結局無理な相談

だと分かっていながら、諦め切れなかった。

この年の作柄は三分作ぐらいで、タミの期待を裏切る結果に終わった。

正月には子供達に、セーターの一枚でも買ってやりたいと、タミは豚を飼うことにした。

今まで以上増やすと薪が足りなくなる。

思案していると「山の雑木を片付けて欲しい」と話があり、タミはこの話に飛び付いた。

収穫が終わった十二月から仕事に行き始める。

朝、四時起きして弁当を作り、五時には出掛ける。

十二月の始めならまだ雪も積もっていないが、オホーツク下ろしの風が吹き荒れて、冷え込む。

朝の道は上りになるが、タミは「帰りが楽でいいから」と自転車を出掛ける。

「七時過ぎから仕事を始めて、四時にはしまうと帰りは朝の半分の一時間で帰ってこれる」といって、毎日五時には家を出る。

道が凍り付いて、雪が積もっても、自転車に乗って行くのだが、心臓が無理が掛かることに、誰

も気が付かなかった。

山へはいると枯れ枝を拾い集め、折れている枝は切り落として、たくさん集まると馬で運び出す。

タミは「薪が貰えて有り難い」といいながら毎日休まず仕事にいった。

タミは、家の借金と家族のことを考えて、冷える中を自転車ですぐ通うのだが、健康には自信があるので、あまり苦にもならなかったようだ。

三月始めまで通い、雪が緩んで山へ入れなくなつて仕事を止めた。

ほっと一息ついて体を休めていた三月末の午後、苦しみ倒れた。

急いで医者を呼んでその場は落ち着いたが、それ以後、タミは健康を取り戻すことができず、医者へ行くのが日課になる。

この年も凶作に終わった。

一九五七（昭和三二）年の五月、戦争にいったまま、どうなったか心配していた、タミの弟の戦死の公報が役場から届いた。

誰もが諦めていたことだが、「十二年も過ぎて

からでは遅すぎる。死んだ年も日付も出鱈目だろう」といって、タミは怒っていた。

田舎では珍しい町葬をする事に決まったという。こちらの都合など関係なく、役場の人がきて段取りを付けていった。

葬儀の日は、町長始め、街の有志がほとんど集まり、なんだか分からないうちに終わった。

白木の箱も置かれていたが、タミは不機嫌に「この中にお骨が入っているはずがない」といって、みんなの止めるのも聞かずに開けてみた。

中には卵大の石ころが一つ入っていて、周りの人も「やっぱりなあ」という感じで見ている。

タミは、「どうせ裏の川からでも拾ってきたんだろう」と怒ったが、みんなで宥めた。

公報が入ったんだから、認めない訳にはいかなというところで、この後は、佐平の好意で弟の妻の名義にして、土地と家を建ててやった。

一九五八（昭和三三）年からの鍋底景気と凶作が続き、人間不信の中で、タミは何度も倒れた。

入退院を繰り返しながら「済まない、済まない」

と家族に気を使っている。

それでも有り難いことに助けてくれる人も大勢居て、農業は何とか続けることができた。

タミの最後の仕事は、佐平を看取ることであった。

それも無事済ませて、佐平が死んで三年後の一九七四（昭和五〇）年四月、心臓、肝臓、腎臓、腹膜を併発して、六九才の人生を終える。

終わりに

タミは佐平と結婚したことに満足していた。病弱でお人好しの夫を庇い、時に喧嘩もしながら、一生懸命働いて、なお貧乏から抜け出せずにいて、「父ちゃんと結婚して幸せだったよ」と。タミにいわせるものはなんだろう。

佐平の人柄か、タミの人間性なのか？

女の一生は男次第といわれるが、「幸せな一生だった」と言い切った言葉に救われている。

参考資料 『総合資料日本史』 浜島書店

「新世界」の母親たち

— 二〇世紀初頭アメリカの移民女性 —

上杉佐代子

はじめに

「・・・あまりの落差なので、私は新しい人生にまだなじめず、落ち着きません。時には自分は本当に日本にいるのかしら、これがあんなにも恋い慕っていた私の生まれた国とその人々なのだ」と、独り自分に語りかけることがあります。

・・・世界中どこでも、アメリカほど女性が自由で尊重されている国はないと思います。」⁽¹⁾
十一年の留学生生活を終えた十七才の津田梅子は一八八二年一二月、アメリカの生活を思い起こしてこう語った。

実際、南北戦争後から一九世紀末にかけてのアメリカ中産階級女性の社会的進出は目覚ましかった。禁酒運動や婦人クラブ運動が盛んになり、婦人基督教僑風会、全国女性クラブ連盟が結成さ

れ、二〇世紀に入るとこれらの団体は、女性参政権、児童労働法制定などの社会改革運動にも取り組むようになった。

高等教育を受けた女性も現われた。一八八〇年に高等教育を受けている学生の三三％は女性だった。しかし大学出の女性に開かれた門は、教師、看護婦などわずかなものだった。「たくさんの教育を受けながら、本当の重要な仕事が見出せない」（ジェーン・アダムス）と悩んだ女性たちはセツルメントハウス運動を創造した。「『他の半分の人たちの住む世界』を知って、友だちになりたい。」「私の求めていた道は、貧しい人々と共に生き、働くこと」と、多くの女性たちが貧しい地域——大半が移民居住地域だった——に飛び込んで行った。この『他の半分の人々』の生活こそが、躍進めざましい一九世紀—二〇世紀初頭のア

メリカ資本主義の発展を促し、中産階級女性の生活を支えていたのだ。⁽²⁾

歴史家メアリ・ライアンはこの時代の女性の役割を次のように総括している。「世紀転換期のアメリカは、鉄鋼、鉱山、建設の時代であり、筋骨たくましい鉄鋼労働者と、新興成金の攻撃的な傲慢さに代表されるように、アメリカ経済史の中でもっとも男性的と見られる時代である。しかしこの時代女性は男性と肩を並べて社会の発展に重要な役割を果たした。労働者階級女性の家内労働及び賃労働は労働者階級の生存に不可欠であったし、一方中上流階級女性は全国組織を作って革新主義運動の中堅となった。移民を中心とする労働者階級女性と女性社会改革者は共にアメリカの女性像をつくりかえたのである。」⁽³⁾

移民女性はアメリカ社会形成にどのように関与したのだろうか。本稿では、世紀転換期の移民女性、主に南イタリア人と東欧ユダヤ人移民家族の母親の生活に焦点を当てて、彼等がアメリカ社会にもたらしたものを探ってみたい。

一、新移民

一九世紀半ばから、アメリカ合衆国には毎年数十万の単位で移民が流入した。その大半は、アイランド、ドイツ、北欧諸国からの移民だった。一九世紀末になると南・東ヨーロッパからの移民とりわけイタリア人と東欧ユダヤ人の移民が急増し、年間移民総数は一〇〇万人を越えるようになる。西・北欧諸国からの移民に対し、南東欧諸国からの移民は新移民と呼ばれた。新移民は言語はもちろん、宗教も生活習慣もアングロサクソンとは異なるものを持っていた。

一八八〇年から一九一三年の間に南イタリアから約四〇〇万人の移民が到来した。そのおよそ八〇%が男性だった。移民の大半は、故国では穀物、葡萄や柑橘果物などの生産に従事する農業労働者だった。ある者はわずかな土地を所有していたが、それだけでは食べていけず、分益小作農として寄生地主の土地を借り、また日雇の農業労働にも従事した。一九世紀末に起こった農業恐慌は

南イタリアの農産物価格を下落させ、土地を手放さなくてはならない農民が増え、農業労働者は失業にあえいだ。農業生産を補ってきた手工業的仕事も工業の発達で消滅し始めた。おりしも新大陸は求人難で移民労働者を次々と吸収していたし、渡航費用も低下していた。農民たちは土地を維持または買い戻すため、アメリカに渡って現金を蓄えようとした。それが成功したか否かはともかくイタリア人移民の本国帰還率は非常に高かった。女性の渡航者は、夫が渡航後三、四年して呼び寄せるケースがほとんどだった。⁽⁴⁾

東ヨーロッパのユダヤ人の渡航理由はもう少し複雑だった。ポーランドからリトワニア、白ロシア、ウクライナにかけての帝政ロシア領内に、ペイルと呼ばれるユダヤ人居住地域に制限されて五〇〇万人のユダヤ人が住んでいて、製造業（半数は被服業）、商業、酒・穀物の取引などに従事していた。一八八二年の「五月法」によりユダヤ人は農村地域の居住を禁止され、またモスクワなどの大都市から締め出された。農産物取引は不可能

となり、もともと人口過剰なペイルは一層競争過多となった。職人は近代的大規模生産には打ち勝てず、ユダヤ人に対する差別・偏見のため近代的工場労働者になる道も閉ざされていた。未来に悲観的になっていったユダヤ人に対し追討をかけるかのようにポグロム（ユダヤ人迫害）が襲った。

こうした中で一八八〇年代にはユダヤ人の社会主義運動が起こったが、一九〇五年の革命の敗北により革命家への弾圧は過酷を極め、ポグロムも激しくなった。⁽⁵⁾

移民はユダヤ人にとって不可欠となった。一八八一年から一九一四年までに約二〇〇万人―東欧ユダヤ人の三分の一が故国をあとにした。アメリカの会社は、「アメリカでは金ができる」と宣伝した。いたるところでアメリカについて事実と空想の混在した話が交わされた。「アメリカでは億万長者が貧しい娘と結婚する」「男も赤ん坊を抱き、荷物を持ち、皿洗いをする」といった話は若い娘たちの心をとらえた。「アメリカでは学校は義務教育で、ユダヤ教徒でもそうでない者でも教

育を受けられる」と教育への期待も高かった。ポグロムを逃れ、「何よりもアメリカにはツアーリがない」と自由の新天地を求め、人々は古い持ち物を売ってアメリカ行きチケットを買ったのだった。

ユダヤ人の多くは家族ぐるみで移民した。まず父親がアメリカに渡り、次に働ける子どもが渡って、渡航費用を作り、残りの家族を呼び寄せるというケースが普通だったが、ネットワークが出来ると就労可能年令の息子や娘が初めに渡って、家族を呼び寄せることもあった。当然女性の比率も四三%と高く、また他の移民集団に比して故国帰還率は二〜三%と非常に低かった。

アメリカに上陸した移民たちはニューヨーク、シカゴ、フィラデルフィアといった大都市に住んだ。中でもニューヨークのロワーイーストサイドにはユダヤ人渡航者の六四%が最初の居を構えた。この移民街で人々は最初の幻滅と羨望を味わうことになる。⁽⁶⁾

二、日々の糧を求めて移民女性の就労形態

大西洋を渡った人々を最初に迎えたのは、ニューヨークなど大都会の賃貸アパートだった。太陽と緑のない、石とブロックの生活。町は夜間に点灯され、絶え間ない都会の雑踏が聞こえる。イタリアの農村から来た人々はもちろん、東欧からのユダヤ人にとっても、近くに森のない生活は十分に疎外感を起こさせるものだった。「私の国では人々は戸外で料理し、洗濯もするし、服も作り、マカロニも作ります。人々には笑いが絶えませんが。アメリカではトントン階段を上るだけ。大勢の人が一つの家に入って、いつもいつも働いています。お金は出来るけど、いい空気はどこにもない。」「私はもう長い間笑っていません。なぜって？　ここは別の国ですもの。だれもが自分のために生き、お金のために生きています。いつもお金、お金、いそげ、いそげ……です。」⁽⁷⁾

しかし、移民女性にとって最大の難関は、家族が生きていくための収入をどう確保するか、とい

うことだった。

世帯主の収入だけで一家を支えることは先ず不可能だった。ユダヤ人移民の多くは被服産業などの賃労働や行商人などの自営業についた。イタリア人男性の仕事は、日雇労働など不規則労働が多かった。一九〇〇年頃、労働者世帯が標準的な生活を維持するのに必要な収入は八〇〇ドルとされたが、ニューヨークの男性世帯主の平均収入は、イタリア人が五一九ドル、ユダヤ人が五二〇ドルだった。ニューヨークの調査では、世帯主の収入だけで暮すユダヤ人家庭は二〇%、(アメリカ生れの家庭は六四%)に過ぎなかった。⁽⁸⁾

イタリア人もユダヤ人も、「家計を助けるために、家族員のだれもが働く義務がある」と考えていたが、必要な収入を得るために移民家族がとった方法は多様であった。とりわけ、妻や娘が働く形態は民族によって異なるため、民族の文化的背景、家父長制との関連で、その就労形態が論ぜられてきた。

V. ヤンスーマクラフリンは、バッファロー

(ニューヨーク州)のイタリア人コミュニティを研究して、イタリア人女性は伝統的な価値観、性役割意識に抵触しないような形で収入の道を求めたのであり、文化的背景が重要であると指摘する。二〇世紀初頭のバッファローには多様な移民グループが存在したが、アイルランド人、ドイツ人、とりわけポーランド人女性は、工場労働や、家政婦の仕事に熱心に求めた。一方、センサスによると、イタリア人妻で、フルタイムで働いているものは二%に過ぎず、一二%が下宿人を置いていると答えたほかは無職と解答した。イタリア人女性を選んだ収入の道は、内職と季節的に缶詰工場などへ家族ぐるみで働きに行くことだった。これらは、子どもから離れることなく仕事ができたとし、労働を通して子どもをしつけるという、故国での価値観とも一致していた。また、他の男性の監督下に入ることがないので、夫のプライドを傷付けることもなかった。イタリア人男性は、自分の妻や娘が他の男性と肩を並べて働いたり、監督下に入るのを極度に危険視したのである。したが

ってイタリア人家族では、妻のみならず、娘が外で働くのも忌避する傾向があった。就労可能年令の子どものうち、男の子は六七%が働いていたのに対して、女の子は二九%だった。⁽⁹⁾

マクラフリンが伝統的価値観や文化的背景が就労形態に影響を与えることを強調するのに対して他の要因、例えば幼い子どもを抱えているなどの家族構成、雇用機会などの経済的要因といったものを考慮に入れる必要も指摘されている。実際、一九一一年、働く妻のいるイタリア人家庭はバッファローでは〇%だったが、ボストンでは一六%、ニューヨークでは三六%に上った。ニューヨークでは、一六才以上のイタリア系女性の四五、五%が働いており、黒人とポヘミア系について高い数値を示した。⁽¹⁰⁾

移民女性の就労形態は地域により、民族により多様であったが、共通して言える傾向は、未婚の娘は外に出て働き、母親は家に留まって、内職や下宿人を置くことで収入の道を得たことである。

(表参照)

(表) 家計の収入源

上段：7大都市の平均
下段：ニューヨーク市のみ
(1911年、サカ調査から)

	ユダヤ人	イタリア人
妻が就労	8% (1)	17% (36)
子が就労	36 (31)	22 (19)
下宿人 寄宿人	43 (56)	27 (20)

E. Pleck, "A Mothers Wages", (注10参照)
および S. Glenn, Daughters of the Shtetle, p. 69 より。

ユダヤ人家庭は下宿人を置くことが多く、一方イタリア系既婚女性は内職に従事した。一九〇七―八年の調査では、被服産業で働くイタリア女性の四一%が、衣服の仕上げの内職をしており、その大部分は二〇代〜三〇代の子育て期の女性だった。また別の調査では、イタリア人の住んでいる賃貸アパートの二五%で内職が行なわれていた。⁽¹¹⁾

一九二〇年頃まで、かなりの企業が衣服仕上げ、ベビー服、レース、かぎ針編み、造花、帽子

製造などを内職に出した。労働力の供給は大きく、労賃を押し下げている。⁽¹²⁾

どんなに低賃金でも、内職は家事・育児と両立するため、既婚女性にとって恰好の仕事だった。また内職は英語が話せなくても済むし、見知らぬアメリカの制度と関わる必要もなかった。

内職はしばしば家族全体を、とりわけ子どもを巻き込んだ。女の子は、仕付け糸を抜いたり、ボタンを付けたり、造花の花びらを分けたりした。

大きい子どもは母親と同じ仕事をした。妹や弟の子守をしたり、家事を担って母親を助けたりもした。時には失業中の夫や息子が家事を手伝って、母親が出来るだけ長時間内職に従事できるようにした。⁽¹³⁾

あるイタリア人少女は次のように語った。

「私は一才です。・私の兄弟姉妹は皆家の手伝いをします。私は毎朝学校へ行く前に部屋の掃除をして、朝食作りを手伝います。それから皿を洗います。学校から帰ると一時間ぐらい宿題をして、それから造花を作ります。姉さん

や妹、従姉妹やおばさんや母さんも造花を作ります。・朝学校へ行く途中私は仕上げた花

を店に届け、帰りに次の材料をもらいます。」⁽¹⁴⁾
鎖つなぎの内職を学校に持って来て、休み時間にやる子もあった。内職が忙しいときには子どもに学校を休ませて手伝わせることもあった。内職の盛んな地域では子どもの無断欠席が多く、また子どもを一週間に二日三日と休ませたり、午前中だけで帰させる親もあった。内職は、母親が子供の労働を監督し、家族全員で働くという故国の伝統にも合致していた。⁽¹⁵⁾

ユダヤ人家族の場合、一九世紀末には内職者の主流を占めていたが、二〇世紀に入ると内職率は三%と激減する。内職幹旋業者はユダヤ人が多いのに、ユダヤ人妻は内職をせず、下宿人・寄宿人を置くという収入の道を選んだ。七大都市の平均では、イタリア人の二七%、ユダヤ人の四三%が下宿人を置いていたが、ニューヨークのユダヤ人家庭の場合、五六%に上った。⁽¹⁶⁾ (表参照)

移民たちの大部分が住んでいた賃貸アパートは

五〜七階建の建物で、各階は四つのアパートメント（街路に面して二つ、裏に面して二つ）に分けられ、真ん中に廊下があった。各アパートは三〜四室、水道と流しが付いていたが、便所は二世帯に一つずつだった。密集したアパート群の悪名高きスラム街も、二〇世紀に入ると数々の改善が施され、ニューヨークのロシア系ユダヤ人世帯の九八、五％が世帯ごとの独立した水道施設を、また九六、三％が水洗便所を使っていた。⁽¹⁷⁾

移民家族にとって家賃は最大の出費だった。ニューヨーク市の家賃はアメリカ国内でも一番高く移民たちは高い家賃の重圧を、下宿人を置くことによって軽減しようとした。下宿はしばしば家族のライフサイクルに合わされた。子どもが小さいときは、収入を増やすために下宿人を置き、子どもが働けるようになるまで続いた。通常下宿人はその家で一番良い部屋を与えられた。⁽¹⁸⁾

下宿の需要も多かった。毎年ロシアやイタリアから、十数万〜二十数万の移民が流入し、その中には単身の男女も多く、賄い付きの同郷の家族へ

の下宿は便利だった。女性の場合、家事や子守を手伝うなど負担が大きい反面、一人でアパートに住むよりもはるかに移民社会に受容されやすかった。下宿人の世話は明らかに主婦の家事負担を増大させたが、食事付きの場合、下宿人の食費からもいくらかの利益を引き出すことも出来た。⁽¹⁹⁾

ユダヤ人女性には「ビジネス」にも従事した。ニューヨークやシカゴでは女性の行商人、屋台売りがいたるところで目に付いた。果物、衣服、魚などを手押し車に積んで売り歩いたり、小さな売店を経営する女性の「大軍」があった。こうした仕事は、夫以外の男性の命令を受けないし、家事と両立するので、独立した好ましい仕事と考えられた。⁽²⁰⁾

母親が内職や下宿人の世話などで補助収入をもたらしたのに対し、娘たちは工場に出て働くことで家庭の主要な稼ぎ手となった。表のように、子供が働いて収入をもたらしている家族は、二十〜四〇％に上った。一九一一年トライアングル・ブラウス工場の火災は一四六名もの若い女子労働者

大部分はユダヤ系とイタリア系の命を奪ったが、この時の調査では、あまりにも多くの女子労働者が、小遣稼ぎではなく、家族を養うために働いていることに調査員も驚いた。例えば、ロシアから来た一七才の少女は、父親の収入が週七ドルにしかならず、兄は失業中で、妹と二人でブラウス工場で働き、父の二倍以上の収入を得ていた。ニューヨークとフィラデルフィアのいくつかの産業の調査によると、イタリア人もユダヤ人も家計収入の四〇%近くを働く娘が支えていた。⁽²¹⁾

三、家事労働

内職をするにせよ、下宿人をおくにせよ、母親たちの生活の場は、家庭にあり、生活の中心は家事労働だった。「新世界」での家事労働はどのようなものだったのだろうか。

アメリカでは、一九世紀の末までにほとんどの大都市に上水道が引かれていた。しかし屋内の配管は別で、階級差が激しかった。主婦たちは遠い

川や泉まで水汲みに行く必要はなかったものの、毎日屋外の共同水栓まで水を汲みに行かなければならなかった。しかし、前述したように、二〇世紀の初頭には大都市の賃貸アパートに少なくとも世帯ごとの水道と流しが付くようになる。⁽²²⁾

二〇世紀に入ると、次々と新しい家庭電気製品が発明された。電気アイロンは一九世紀末、電気掃除機は一九〇七年に発売され、一九一四年ごろには電気洗濯機が現われた。第一次大戦後、都市では電気が急速に普及し、電気料金も低下していった。⁽²³⁾

二〇世紀初頭は、アメリカが大量消費社会への変化の兆しを表わした時期にあり、家庭が決定的にその生産的機能を失って消費の単位になっていく時期だった。中産階級女性がその恩恵に預かって家事負担がかなり軽減されるようになったのに対し、移民女性の場合はどうだったのだろうか。

「お金持ちの家には、大理石の浴槽があつて、夜でも昼でもお湯や水が出るわ。・・・でもああいいう『百万長者の品物』は私たちにはおとぎ

話も同然よ。」⁽²⁴⁾

トイレと風呂場は共同のものが多く、一九〇七―八年のニューヨークの労働者世帯の調査では、世帯内にトイレがあるのは三一%、風呂場は二〇%に過ぎなかった。人々は台所に大きな桶を置いて洗濯したり、入浴したりした。明りには灯油ランプ、燃料には石炭が使われた。ガスは一時間に二五セントもし、とても手の届くものではなかった。しかし石炭といえども一ブッシェル二五セントかかり、労働者階級の家庭では「都市の森」から燃料を集めた。建設現場や産業廃棄物から板切れや薪を拾って来たり、鉄道や波止場から石炭を拾ったり、また石炭配達トラックの後をついて歩いて、落ちた石炭を拾って来たりした。こうした行為は違法だったが、家庭では奨励された。とりわけ男の子たちは毎日の日課のようにこの役割を果たした。一九〇九年の少年犯罪のトップは木や石炭の窃盗だった。⁽²⁵⁾

イタリアでは月に一回、女たちがグループになって近くの湖で洗濯をしたが、アメリカでは台所

で洗濯しなければならなかった。月曜日は洗濯日で家中大騒動になった。ストープで湯を沸かし、大きな桶で手洗し、アパートからアパートへ張り巡らした洗濯ロープに洗濯物を干すのだった。イタリアでは洗濯は社会的機能を持っていたが、アメリカでは個人的な作業になったのだった。

狭いアパートをきれいに保つのも大変な作業だった。主婦はあらゆる努力を払って室内を清掃した。移民委員会の調査でも、外部の汚さに比べて内部が清潔に保たれていることが報告された。台所の鍋・釜を隠すために布を覆い、カレンダーや絵、家族の思い出の写真や品々で壁を飾った。⁽²⁶⁾

料理の材料も調理法も故国と違った。故国では食べ物や貯蔵したがアメリカでは貯蔵所はなく、主婦は毎日買い物に出なければならなかった。

アメリカ的食生活を受け入れることはアメリカ化のしるしと見なされた。アメリカ生まれのソーシャルワーカーたちは科学的な料理、短時間でできる調理法を勧め、また缶詰などの既製食品、白パンなどを称賛するキャンペーンも行なわれた。

移民たちは、自家製缶詰は肯定していたが、商業的缶詰には批判的で、野菜なども新鮮な物を求めた。故国の食文化の伝統に根ざし、イタリア人街にはパスタの店、ユダヤ人街には「清浄肉」の店が並んだ。一九一七年、激しいインフレで、清浄肉と、イタリア人にとって不可欠な玉葱の価格が急騰したとき、主婦たちの怒りは爆発し、食物暴動が起こった。主婦たちは集团的に不買運動を行ない価格を下げることに成功したが、これは単に物価高騰との闘いだけではなく、移民たちの食文化を守る闘いでもあった。⁽²⁷⁾

移民家族の母は近代化の恩恵を十分受けることなく、みずからの労働と工夫によって新しい環境に適応しながら家事労働を行なうとともに、故国の文化を可能な限り守ろうとしたのだった。

四、母と娘

南イタリア人も東欧ユダヤ人も強い家父長制的伝統のもとにあったが、家族の現実の柱は母親だ

った。イタリアでは母親は、家事のほかに紡績・機織りなどの家内生産、家計の管理に従事した。

「母親が死ぬと一家は離散の憂き目に遭いました。でも、父親が死んでも母親さえ生きていれば、家族は雌鶏にまといつくひよこのように皆一緒に暮しました。」⁽²⁸⁾

伝統的なユダヤ人社会の中では宗教学者が最高の地位を占めた。そして、妻は夫が学問に専念できよう収入を得、家事をこなすのが理想とされた。女性が働くことは当然視されていた。実際のユダヤ人は職人や商人が多く、夫婦揃って働いていたが、夫が仕事半分、祈り半分という状態で、残りの仕事を妻が切り盛りすることも多く、妻が夫を「甘やかしている」例がよく見られた。「アメリカでは、夫は妻を養う義務がある」と強調されるほどだった。貧しい隣人に施し物をするのも女性の役目で、女性はコミュニティの中心でもあった。⁽²⁹⁾

新世界でも母は家政の中心だった。夫や子ども、下宿人からの収入をまとめそれを必要なもの

と交換するのは、主婦の腕にかかっていた。賃金は故国の貨幣に換算すれば高いように見えるが、生活費も高かった。故国では家もあつたし、食べ物も庭で採れた。何と言つても家賃は最大の出費で、男性世帯主の年間収入の三分の一にのぼつた。賃金は週単位で支払われたので、家賃分をより分けておくのは主婦の大事な仕事だった。渡航前の借金の返済、老親や親戚の扶養のための故国への送金、さらに同郷人の互助組織の保険金も支払つた。

夫たちは、給料袋をそっくり渡すことを「期待」された。給料袋を渡して決められた額の小遣をもらう夫は「よい夫」とみなされたが、給料の一部しか渡さない夫もいて、妻との間に緊張関係が生まれた。大方の場合、妻は夫の外での付き合いを理解し、夫の小遣には寛容だった。⁽³⁰⁾

子どもの賃金は家計収入の一部だった。二〇世紀に入ると多くの州で児童労働禁止法が設けられ一四才未満の労働は禁止された。一九一〇年には一四才〜一五才の少年少女の三〇、七%が就労し

ていたが、移民一世の少女の場合三九%が就労（男の子は三三%）していた。一方中学校を終えるまでは学校にとどまる傾向もあり、移民一世の一四才〜一五才の少女の五三%は就学中だった。しかし高等学校に進む子は稀で、ニューヨークやシカゴの調査では移民を父に持つ子どものうち、高等学校に入る子は四%前後だった。（アメリカ生れの白人を父に持つ子は七〜八%）

最も貧しい家庭の子は一四才になるや働き始めた。親も子も一四才の誕生日を待ち望んでいた。学校は当時規則が厳しく権威主義的だったし、移民の文化を尊重する精神も欠けていたので、子どもにとって必ずしも楽しいところではなかった。⁽³¹⁾ 学校へ行きたくても家族のために働きに出る子どもは多かった。

「学校に行きたかったのですが、それは不可能だと分かっていました。私は母を助けたいと思つていました。母とは一心同体で、弟や妹は自分の子どものような気がしていました。私の給料は全部家族のために使いました。」⁽³²⁾

家族への義務感、責任感はとりわけ長女に強かった。妹や弟が働けるようになるまで婚期を遅らせる娘は多かつたし、中には一生独身で両親を養う娘もあつた。男女を問わず、第一子は働きに出る以外に選択の余地はなかったが、家計が許せば年下の子ほど学校に長くいる傾向があつた。両親が学校を続けさせようとしても、家庭の苦境を見て働きに出るべきではないかと悩む娘もあつた。⁽³³⁾

アメリカ生れのソーシャルワーカーたちは、若い移民女性が自立のためではなく、家族に対する強い義務感から働きに出ることに衝撃を受けた。しかし、ティリーとスコットの研究が示しているように、家族のために働くことは前近代社会では一般的なことだつた。故国では、娘は母の家事労働を手伝つたが、アメリカでは母を助けるために外で働くという違いだつた。⁽³⁴⁾

給料袋をそっくり渡すことは子どもの「義務」だつた。子どもたちは給料を母に渡し、その中から、週に二五セントから一ドルくらいの小遣をもつてらう習慣だつた。しかし、娘たちの多くが家族の

ためとりわけ母親のために働きに出たとしても、工場労働は娘たちに新しい経験の場を与えた。街にはアメリカ的消費文化が氾濫していた。故国から持ってきた衣服は全く時代遅れだつたし、髪型も違つた。ダンスホールや五セント映画館のような娯楽施設もあつた。賃金を稼ぐのは自分だ、自分の賃金を自由に使いたいという意識が生まれる。妥協の産物として、「下宿代」として子どもが賃金の一部を家に入れ、残りを自分のために貯金したり、使つたりすることも起こつた。⁽³⁵⁾

アメリカ生活は娘たちに新しい経験をもたらし、アメリカでは上の学校へ行く道も開かれており、学校を続けたいと願う娘も少なくなつた。両親は娘の教育を重視していながつた。ユダヤ人は教育を重視したが、男の子が優先され、しばしば女の子は兄弟を上る学校へ行かせるために働きに出された。イタリア人家庭は概して学校教育に価値を置いていながつたが、それでも男の子の教育が優先された。女の子はどうせ結婚するので学問は不要と考えられた。しかし母親の中には娘の

願いを何とか叶えてやりたいと考え、夫の男女差別的要求と娘の願いの板挟みになるものもいた。

「父は私が高校へ行くのに反対でした。結婚を考える時期だということです。父と母はその点で意見が合いませんでした。・・・母は穏やかに恐る恐る言いました、私が何かもつと新しいことををしたがっていると。・・・」⁽³⁶⁾

イエズイエルスカの自伝的小説『ブレッド・ギヴァーズ』には母と娘の温かい心の交流が描かれている。主人公のセイラは働きながら学んで教師になる決心をし、父の反対を押し切って家族を捨て、独り暮らしを始める。ある夜、空腹と寒さに凍えながら勉強していると母が訪ねてくる。母は娘が寒がるうと、父親に内緒で、羽根布団とニシンの酢漬けを持ってきてくれたのだった。

「・・・その晩私は羽根布団にくるまりながら、この世の何物にもまして母の愛ほど暖かいものはない、と感じていた。」⁽³⁷⁾

母親は父親の娘に対する支配に対して緩衝的役割を果し、娘が母とは違った未来を切り開くことを

陰ながら援助したのだった。

家庭と移民コミュニティに生活の場を限定されていた母親と違い、子どもたちはアメリカ的な文化を家庭に持ち込んだ。子どもたちは学校で英語を習ったが、家庭ではイタリア語やイディッシュ語（東欧ユダヤ人の言語）が使われた。家庭では英語の使用を禁止する母親もいた。一方子どもから親が英語を習うこともあった。⁽³⁸⁾

娘たちは母親が新しいスタイルの服装をするよう働きかけた。

「母がここへ来たばかりの頃、父よりも老けて時代遅れに見えました。それが頭にかつらを着けてスカーフをかぶっているせいだと分かり、母を傷付けないように、何とかスカーフを取らせてみようと考えました。ある日二人だけになったとき、私はふざげ半分に母からスカーフを取らせ、髪を真ん中から分けて結いました。母が全く別人のように見えるのに驚きました。」娘は母親が今後スカーフをかぶらないよう説得し夫の目を気にする母に言う。「お父さんだって

髭を剃ったじゃないの。」帰宅して驚く父に、母は言う。「『私だっついていつまでも時代遅れのまじやいませんよ。』」⁽³⁹⁾

アメリカの消費文化の洗礼を受けた娘と母親との間に価値観の違いも生じた。母親にとつては心をこめて作った手作りのものが最上の品だった。

「お金さえあれば5番街に行って素敵な物を買えるわ!」と言う娘に母は答える。「そうだよ。買うんだよ。アメリカじゃね、お金持ちでも機械で作ったものを買うだけ。ロックフェラーの娘だって、嫁入り道具は店で買った既製品ばかりじゃないかい。私の(手作りの)テールクロスには心がこもっているんだよ。・・・」⁽⁴⁰⁾

子どもたちはアメリカ化するにつれ、親を恥ずかしいと思うようになった。「僕はイタリア人の友達とよく言ったものです。『親には親の生き方がある。ぼくらは、ばかげた古めかしい習慣に縛られず、ぼくら自身の生き方をしよう。』・・・ぼくらはアメリカ人の友達を家へ呼びませんでした。学校の行事にも親を来させませんでした。」

とイタリア系の少年は語った。⁽⁴¹⁾

移民一世である親の世代、とりわけ母親はアメリカ化の過程から取り残され、子どもたちとは別の世界に住んでいるかのように見えた。母たちの世界とはどのようなものだったのだろうか。

五、母たちの創る世界

ソーシャルワーカーやアメリカ生まれの白人の目に映った移民の母たちは、英語も話せず、古い生活スタイルを残すよそよそしい存在だった。しかしその奥で母親たちは生き生きとした温かい世界を創っていた。

新しく海を渡った移民たちは、先ずローワーストサイドなどの移民集住地区に住み着いた。道路や市場は人々が集まり、買い物や子守をしながら情報を交換する場だった。買ひ物の仕方、洗濯の仕方、鍋の買ひ方などアメリカ生活への適応の仕方を知らせあった。

隣近所の人々とは家族同様の付き合いもした。

「お互いに親しくしていました。ちょっとドアを叩けばすぐ迎えいれられて、家族同様になります。誰かが病気になれば、近所の人が世話してくれます。私の母が手術をしたときでした。

隣人が小さい子どもの世話をしてくれ、買い物や料理まで手伝ってくれました。誰かが困るとお金を集めてあげました。」⁽⁴²⁾

洗濯桶、鍋や皿なども互いに貸し借りした。買い物に走るとき、向かいの住人にちよつと子どもを預けていくこともあった。援助のネットワークの担い手は女性だった。「誰かが何かを必要としていれば、・・・集まって食べ物を集めてあげるの女たちでした。」

時には民族の壁を越えて心を通わせることもあった。あるイタリア系女性の「母は、ユダヤ人女性ともよく話していました。私たちはユダヤ人やアイルランド人の多い地区に住んでいたのです。母たちは心で話し、理解し合っていました。」⁽⁴³⁾

母たちはアメリカ化の過程から取り残されていたが、お金や物ではなく、愛や親切を大切にす

世界を築いていたのだった。後に社会主義者になったユダヤ人のマイク・ゴールドは母の思い出を次のように語っている。

「母はいつも困った人を見つけては、何日も何週間も何か月も援助の手を差し伸べていました。・・・世界は貧しい人のために創られるべきだ、母はそれを私に教えてくれたのです！」

あるときマイク・ゴールドの母は、夫が殺人犯で逮捕され、3人の子どもととり残されたイタリア女性を援助する。彼女は「イタリア語、イディッシュ語、ハンガリー語、英語などを混ぜて、1時間も話した。」そして、仮縫の内職を見つけてあげ、友だちになる。ある夜イタリア女性は感謝の印に大きなウールのショールをプレゼントする。

「困窮の真つ只中にいても、彼女は時間をやりくりして母にショールを編んでくれたのです。・・・母はこのショールを宝物のように何にもまして大切にしています。」⁽⁴⁴⁾

アメリカ生れのソーシャルワーカーやセツルメントハウスの活動家も、貧しい移民コミュニティ

の中の相互援助と連帯意識に驚き感動し、多くの記録を残した。

人々の生活が窮地に陥ったとき、日常生活での連帯意識が、集団的行動に現われた。

一九〇七年の冬、不況でローワーイーストサイドには失業者があふれていた。家賃は一九〇二年の月一二ドルから一四ドルに上がっていた。女たちは家賃ストライキに立ち上がった。約六〇〇人の女性が団結してストライキを組織して家々を歩き、二、三日後には二〇〇〇人の名が家賃ストライキ名簿に記された。それぞれのアパートは組織され、会合が持たれた。家主の像を作って焼く者もいた。女たちはほうきや屑入れなどを武器にしてストライキを守った。大衆集会も持たれた。一九〇八年一月五日の集会では、警察と家主が赤いストライキ旗を取り去ろうとしたため、スト参加者との間に衝突が起こり、双方にけが人が出た。ストの結果はまちまちだった。家賃を値下げした家主があれば、抵抗した家主もいた。しかし結果の如何にかかわらず、このストライキは主婦た

ちの組織力を遺憾なく示したものだ。 (45)

おわりに

家賃ストライキの約二年後、一九〇九年の秋、ニューヨークで『二万人の蜂起』と呼ばれるブラウス縫製女工のストライキが起こった。東欧ユダヤ人移民を中心とする女性労働者のストは、一九一〇年代の女性労働運動高揚の先駆けとなるものだった。移民家族の母親は直接この運動に参加したわけではなかったが、様々な形態で娘たちの運動を支援した。家賃ストライキの記憶も娘たちには生々しかっただろう。移民一世、母の世代は歴史の表舞台に現われては来なかったように見える。だが、母親たちは家庭の屋台骨であり、コミュニティの連帯の中核だった。こうしたコミュニティの連帯、相互扶助の精神を背景に、若い世代は労働運動に参加し、個人主義的傾向の強い当時のアメリカ社会に新しい息吹きを吹き込んだといえよう。

近年、この移民労働者を中心とする女性労働運動が女性参政権運動に及ぼした影響、近代的フェミニズム誕生に及ぼした影響が注目されているのであるが⁽⁴⁶⁾この点については別の機会にあらためて検討したい。

翻って、今日の日本社会にも外国人労働者が大量に入ってきている。この異文化を持つ人々が社会発展にもたらす積極的な意義についても大いに関心を寄せたいものである。

(注)

- (1) 大庭みな子『津田梅子』(朝日新聞社、一九九〇年)
- (2) Sara Evans, Born for Liberty: A History of Women in America (The Free Press, 1989), 134
- (3) Mary P. Ryan, Womanhood in America: From Colonial Times to the Present (New Viewpoints, 1979), p. 119.
- (4) Virginia Yans-Mclaughlin, Family and Community: Italian Immigrants in Buffalo, 1880 - 1930 (Univ. of Illinois Pr., 1982), pp. 27-32; Judith E. Smith, "Our Own Kind: Family and Community Networks in Providence" in Nancy F. Cott & Elizabeth H. Pleck ed., A Heritage of Her Own: Toward A New Social History of American Women (Touchstone Book, 1979) : Elizabeth Ewen, Immigrant

Women in the Land of Dollars: Life and Culture on the Lower East Side, 1890-1925 (Monthly Review Pr., 1985), pp. 52-53.

(5) 野村達郎「ロシア・ユタヤ人のアメリカ移住の社会経済的背景——アメリカ労働者階級形成の一面面——」『愛知県立大学外国語学部紀要(第一九号、一九八七年)』。

Susan A. Glenn, Daughters of the Shtetl: Life and Labor in the Immigrant Generation (Cornell Univ. Pr., 1990), pp. 8-34; Ewen, p. 52; J. Smith,

(6) Glenn, pp. 42-53; Ewen, pp. 53-57; Irving Howe & Kenneth Libo ed., How We Lived: A Documentary History of Immigrant Jews in America, 1880-1930 (New American Library, 1979), pp. 18-19.

(7) Ewen, p. 62; see also, Glenn, pp. 50-60.

(8) Miriam Cohen, "Italian-American Women in New York City, 1900-1950: Work and School", in Milton Cantor & Bruce Laurie, ed., Class, Sex, and the Woman Worker (Greenwood Press, 1977) : Glenn, p. 66.

(9) Yans-Mclaughlin, "Italian Women and Work: Experience and Perception" in Class, Sex, and the Women Worker: Yans-Mclaughlin, Family and Community, pp. 158-179.

(10) Elizabeth H. Pleck, "A Mother's Wages: Income Earning Among Married Italian and Black Women, 1896-1911", in A Heritage of Her Own; Cohen, pp. 122-124.

(11) Glenn, pp. 67-68; Cohen, pp. 124.

- (12) Leslie W. Tentler, Wage-Earning Women: Industrial Work and Family Life in the United States, 1900-1930 (Oxford Univ. Pr., 1979), pp. 22-23.
- (13) Ewen, pp. 125-6.
- (14) Cohen, p. 126-7.
- (15) Ibid., p. 127; J. Smith, "Our Own Kind".
- (16) Glenn, pp. 69-75.
- (17) 野村達郎「ニューヨーク市ロー・イースト・サイドのユダヤ人ゲッターー—九世紀末・二〇世紀初頭における東欧系ユダヤ人労働者の居住環境—」『札幌学院大学人文学部紀要第三三六号』一九八四年
- (18) Ewen, pp. 119-121; see, Anzia Yezierska, Bread Givers (1925, reprinted in 1975), pp. 14-16.
- (19) Ewen, p. 120; Glenn, pp. 60-62.
- (20) Glenn, pp. 75-76.
- (21) Ibid., pp. 82-84.
- (22) Susan Strasser, Never Done: A History of American Housework (Pantheon Books, 1982), pp. 85-103.
- (23) Strasser, pp. 68-84, 105-124.
- (24) Ewen, p. 155.
- (25) Strasser, p. 100; Ewen, pp. 151-153.
- (26) Ewen, pp. 32, 150, 156-158.
- (27) Ibid., pp. 172-183. Providenceの回菜の運動が扱われていた。see, J. Smith, "Our Own Kind".
- (28) Ibid., p. 35.
- (29) Ibid., pp. 39-43; Glenn, pp. 8-26; How We Lived, p. 7
- (30) Ewen, pp. 101-103, 112-116.
- (31) Glenn, p. 266; Tentler, pp. 94-104.
- (32) Ewen, p. 100.
- (33) Glenn, pp. 85-89.
- (34) Louise A. Tilly & Joan W. Scott, Women, Work, and Family (Holt, Rinehart and Winston, 1978)
- (35) Ewen, pp. 104-108; Glenn, pp. 84-85.
- (36) Ewen, pp. 193-195; Glenn, pp. 86-89.
- (37) Bread Givers, pp. 170-172.
- (38) Ewen, pp. 196.
- (39) How We Lived, pp. 126-127.
- (40) Bread Givers, p. 33.
- (41) Ewen, p. 203.
- (42) Ibid., p. 162.
- (43) Ibid., pp. 86-87, 162.
- (44) Ibid., pp. 203-204.
- (45) Ibid., pp. 176-183.
- (46) Ellen C. Dubois, "Working Women, Class Relations, and Suffrage Militance: Harriot Stanton Blatch and the New York Woman Suffrage Movement, 1894-1909", Journal of American History, June, 1987; Nancy F. Cott, The Grounding of Modern Feminism (Yale Univ. Pr., 1987), 42.

静岡女性史中研究九△△のあゆみ

一九七七年一月二九日 発足

一九七九年『しずおかの女たち』第一集発行

一九八三年『しずおかの女たち』第二集発行

一九八五年『しずおかの女たち』第三集発行

一九八六〇八七年 「戦争と女性」をテーマに学

習。色川大吉『ある昭和史』、遠山茂樹『昭

和史』をテキストに時代背景を学ぶ。八月、

「全国女性史研究交流の集い」（愛媛）に三名参加。

一九八七年九月三〇日、会創立一〇周年記念とし

て、米田佐代子さんを招き講演会を開催。戦

争体験と聞き書き、聞き書きとその体系化の

必要などについて学ぶ。

一九八八年 女性の戦争体験について聞き書きの

方法などを学ぶ。「満州」に行った女性た

ち、戦前の労働運動家など、会員による聞き

書きの発表。

一九八八年 「地域女性史交流研究集会」（東京

足立区）に四名参加。「磐田女性史を学ぶ

会」との交流、会員による報告「近世静岡に

おける墮胎間引の一考察」「アメリカ女性史

の課題と展望」など。八月、特別例会にて、

女性解放の方向と方法、第三世界女性とフェ

ミニズムなどについて徹底討論。

一九九〇〇九一年 新入会員を迎え、脇田晴子他

編『日本女性史』（吉川弘文館）を主テキス

トに通史の学習。報告者は、女性史総合研究

会編『日本女性生活史』（東大出版会）など

を参照。並行して、第四集発行に向けて、編

集方針などを検討。各自、聞き取りや研究を

進める。

一九九二年 第四集のための原稿を持ち寄り、検

討しあう。第四集発行のための打ち合わせな

ど。

八月、第四集発行。

静岡女性史研究会会員名簿

小和田哲男	静岡市森下町一―一六―五〇一
(顧問)	〇五四―二八一―九九三三
勝又千代子	静岡市南四二―三
(代表)	〇五四―二四六―二〇二〇
上杉佐代子	静岡市大谷二九〇〇―四〇
	〇五四―二三七―五七六六
大橋 聖子	静岡市八幡五―二七―一九
	〇五四―二八六―八〇二四
小和田美智子	静岡市森下町一―一六―五〇一
	〇五四―二八一―九九三三
縄 唯美	裾野市佐野一―六九
	〇五五九―九三一―一五八〇
西沢 功子	藤枝市藤岡三―八二―〇一七
	〇五四―一六三―八二―七九五
平井 和子	駿東郡清水町湯川一〇四
	〇五五九―八一―三五五六
△賛助会員▽	
大村 好美	名古屋市昭和区前山町一―七一五
市川 淳代	沼津市松下町八四一―一五

会員募集中!

- 斗ヶ沢志津子 東京都荒川区東尾久六―四二―一九
 大手ハイツ二〇一
- 小川 町子 磐田市向笠竹之内一―二一―二〇七
 長谷川尚美 磐田市豊田町加茂三三六―一九
 山田 玲子 静岡市追手町九―一八静岡中央ビル 静岡新聞社報道センター
 野村千代子 静岡市春日町二―六―七〇三
- *** 編集後記 ***
- ★ 仕事と生活に追いたてられる日々。激動する社会。流されたくない私の強い味方は女性史。(和)
 - ★ 当時、宋との交流も活発で、政子自身東奔西走しており、国際的な時代であった。(聖)
 - ★ 戦後五〇年近くへて、でも未だ様々な思いで生きている人もいっぱいいる。(千)
 - ★ 聞き書きは、自分自身を問われる怖さもあるが心ふるえる素晴らしい出会いもあります。(功)
 - ★ 自分の親の若かりし時、記念すべき写真を載せることができよかつた!(美)
 - ★ 先輩の足を引っ張ることばかりで、勉強不足を思い知らされました。赤面の至りです。(唯)
 - ★ 留学生に日本語を教えながら、人々の国際的移動、異文化間の交流に関心を抱いています。(佐)

しずおかの女たち 第四集

頒価 六〇〇円

一九九二年八月

編集 静岡女性史研究会

印刷 童芸工房

